

目次

目次

第一章	外國語研究の利益……………	一頁
第二章	世界の言語に於ける英語の位地……………	十五頁
第三章	平民的言語としての英語……………	二十七頁
第四章	英語の美……………	四十一頁
第五章	外國語研究の方法……………	五十七頁
第六章	日本語に現はれたる歐羅巴語……………	七十五頁
第七章	博覧學と地名……………	八十五頁
第八章	最良の英語讀本……………	九十八頁
附 録		
一、	英語自習獨學の注意……………	百十五頁
二、	西班牙語の研究……………	百三十頁



自序

書中収むる處の論文は茲に蒐集して一書を成すの前曾て東京獨立雜誌に連載せしものなり。著者は此書に於て歐羅巴語、殊に英語の原質並に特性を讀者に紹介し以て其研究の精神を惹起せんと試みしなり。

卷末に友人佐伯好郎氏の論文を掲げしは此書の効用をして一層大ならしめんが爲なり、主を先にして客を後にするは禮節に於て大に缺くる處あるの觀なき能はずと雖も、是れ攻究すべ

自

序

き問題の順序の然らしめし處なるを以て切に
氏並に讀者の宥恕を乞はんと欲す。

明治三十二年四月十九日

内村鑑三

外國語之研究

内村鑑三著

外國語研究の利益の利益

第一章 外國語研究の利益

詩人ケルテ日外國語を曉得するは一新世界を發見する事なりと。
希伯來語に通達せん乎。是れ今より四千年前の古昔に溯り、摩西、ダビデ
の深想を直ちに彼等の言語に於て探ぐるの便と快とを吾人に供する
のみならず其研究は共同源的言語なる亞拉比亞語、スリヤ語、アッシリ
ヤ語、カメルン語等の稽査に吾人を導き、西亞六千年間の文化を吾人の
前に開き、舊記を瓦片又は石塔の面に讀んで、吾人をして紛混錯雜の
今を離れて遠く人類の始祖と與に人智開發の基因を語るの感あらし
む。

印度語を識得せん乎、毘陀經の秘密を吾人の前に啓き、印度哲學の淵源は茲に探ぐるを得べく、東洋思想の濫觴を茲に追究するの便あり。爾かのみならず、梵語の曉得は直ちに以て印度の西隣なる波斯國の古代を識得せんとするの慾望を吾人の衷に起し、吾人をして毘陀經を以て満足する能はずして、亦ゼンダ教にザルーストラの奧義を究めんとするの渴を感せしむ。又梵語に通達して近世の印度語に移るは甚だ易し、マラタ音、ベンガル音、グゼラチ音は皆梵語の遷化せしもの、又之に波斯、亞拉比亞の語を化合して今のヒンダスタニ語あり、比麻拉亞山脉以南の大陸的半島の趣味深き宗教と哲學とは實に此聖語を識得するに依て吾人の有となすを得べし。

若し夫れ歐洲語の區域を言はん乎、前述の印度語、波斯語も其支派にして、アルメニヤ語は今尙は西亞に存する其遺跡あり。スラブ語は其多く

の土音と共に歐の東南諸邦に普く、所謂ローマンス語なるものは伊、佛、西、葡に其根を深くし、チエートン語は獨逸語とありて、獨逸、和蘭に行はれ、ノース語として瑞、那、丁の諸邦に用ひられ、サクソン語として英民族の國語たり、ケルト語にゲイリック、キムリック、エルス、マンクス、アモリックン等の別ありて、佛の西北隅ブリタニーより愛蘭土、蘇格蘭土に涉りて、土語俗音となりて今日尙は其跡を存す。歐洲語の一に通達することは實に此等多類の國語に吾人を紹介するの指導なるべく、今世文明を其華と粹とに於て究めんと欲する者は必ず此等歐洲語の一に頼らざるべからず。

此に於て乎説をなすものあり、曰く、我に我が榮光ある日本語あり、我れに外國語を學ぶの用あるなし。我れ若し海外の事物に通曉せんと欲せば之を其翻譯に於てすれば可なり、外國語を學ぶは我より降て彼に服

從の意を表するものなり。我は毅然として我の威嚴を守り、我の和歌に我が懐を述べ、我の直立文字に我が想を傳へ、彼をして竟に日本語を學ばしむることあるも我より進んで彼の盤行文字を曉得せんとするが如きは決して爲すべからず。彼のダンテ、シェークスピア何かある、我に貫之、業平のゐるに非ずや、彼のモットレー、ランケ何かある、我に山陽、辰軒のゐるにわらずや、外國語の研究は愛國心を滅殺するの虞れあり、國家的觀念を薄らぐるの害あり、彼れ若し佛語若くは英語を以て我に問はんには、我は我が日本語を以て彼に答へんのみ。

秋なれば深き楓葉も散らすなり

我が討つ太刀の血けふりを見よ

日本男子の情性は實に此の如くならざるべからずと。

* * * * *

日本武官某あり、曾て歐洲に到り、某國の帝王に謁す。王歡んで彼を迎へ、先づ彼を待つに佛語を以てせり、然れども彼の之を解せざるを見るや、更に英語を以て對話を試む、然れども彼又之れをも解せざれば王は伊太利語を試み、獨逸語を試む、然れども彼尙は是をしも解せざれば更に他の二三の國語を試みたり、然れども彼其一をしも解せざれば、王は失望の餘り彼に伴へる通譯人を以て彼に告げて曰く、朕無學にして、未だ日本語を以て卿と共に語るを得ざるを悲しむと、時に流石の日本武官も赤面の餘り冷汗背を濕したりと傳へらる。

又他の日本武官某あり、常に武勇を以て北邊に鳴る、曾て官命を帯びて歐洲に遊ぶ。先づ桑港に着し、其宮殿旅館パリスホテルに投ず。一日空腹にして歸館し、彼の通譯人を待つの間なし、直ちに食堂に入りて食を命せんとするも一語を通ずる能はず、依て止むを得ず、獻立書を取り、矢鱈滅法に其内の

一を指示す給仕領いて去り、暫時にしてスープ一皿を持ち来る、某大に事の成効を喜び、再び獻立書を手にして先に命せしもの、次を指示す、給仕行て又異種のスープ一皿を持ち来る、某少しく事の仕損じたるを悔みしと雖も第三回の成効を奏せんと欲して同一の隨人的行爲を繰り返せば、彼の前に置かれしものは亦スープなりき、斯くて彼は五回の失敗を重ね、六種のスープを吸ひ盡して後來て彼の同行者に告げて曰く「米人のスープを嗜む甚だし」と、又彼に侍せし給仕も事の餘りに奇怪なるに驚きたりけん、翌朝の新聞紙は「日本武官と六杯のスープ」なる面白き一記事を載せたりと云ふ。

然れども是れ言語的無識より來る不利の最も甚しきものにあらざ、思想は翻譯を通して完全に解するを得ずとは言語學上の恒則なり、思想は之を表顯する言語其物に存するものなれば、其翻譯は如何に精確な

る者なるも語を換へて想の眞跡を他に通ずるは甚だ難し、是れ同根的语言語に於てすら然りとす、矧んや異根的语言語に於てをや、獨逸語に譯して沙翁の作は其妙味を半減するが如く、英語に譯せしゲーテの秀作は殆んど讀むに忍びざるものあり、百人一首、古今和歌集を英譯若くは獨譯せしもの、原意を全く毀損するの感あるは勿論の事なり、余は未だカールライルの日本譯にして成功せしものあるを聞かず、ウォルツウオス、ホイットマンを和譯に付するは殆ど成し難きの業なりと信ず、或は之を政治學書にするも、或は譯出するに最も易き科學書類に於てするも、原意を誤たず日本語に翻譯するは實に至難の業なりとす、そは歐洲語と日本語とは全く其原質を異にし、語字の構造、文句の組織に至るまで悉く其趣を異にすればあり、風俗を異にし、宗教を異にし、人生觀を異にする彼我の間に介して彼の意を我に傳へ、我の實を彼に移すの困難

は此業に従事せし者のみ能く熟知するを得るなり。
 英語のホームを家庭と譯して僅かに原意の半を寫すに足るのみ、ゼン
 トルマンは紳士にもあらず、君子にもあらず、ゼントルマンはゼントル
 マンにして之を我が邦人に傳ふるの譯語あるを、The Christian is the
 God Almighty's gentleman なる有名なる一句を邦語に譯せん乎、基督教徒
 は全能なる神の紳士なり」と譯出するより他に途なかるべし、然れども
 原語の高貴莊嚴ある意味は一として此譯文に顯はるゝことなし、基督
 教徒は彼に在ては名譽の稱にして我に在ては凌辱侮慢の辭なり、我の
 「神」全能の二字に敬畏嚴肅の意少なし、紳士は我に在ては盛裝する者の
 稱にして、白痴も華族の列に加はれば紳士あり、盜賊も事業に成功すれ
 ば紳商なり、ゼントルマンなる英語の道德的宏量と常識的風采とを備
 ふるの意を通ずるに最も不完全なる譯語なりとす、英語に熟達し、英人

の意志を透察し、其感情に染み其思想に浸されて始めて「神全能なる者
 のゼントルマン」なる辭句の美と深とを知り悉すを得るあり。
 彼を我に傳ふるの困難あるは勿論我を彼に傳ふるの困難を示す、英人
 デッケンス氏の翻譯に成る定家卿の百人一首を讀むに意義錯雜して
 時には吾人をして抱腹絶倒の感なき能はざらしむるものあり、安部、仲
 磨の「天の原」の一首を左の奇異ある英譯に於て讀めば情なき意義なき
 一個の劣詩たるに過ぎず

On every side the vaulted sky

I view : now will the moon have peered,

I throw, above Mikasa high

In Kasuga's far-off land upheaved.

我の「切腹」は名を重んじ命を輕んずるの行爲なれども、彼の譯字ある

の ^{スライヤ} ^{スライヤ} ^{スライヤ} は失意失戀者の絶望的自殺を意味す、彼の ^{ラヴ} ^{ラヴ} ^{ラヴ} なる語を我に傳ふるの語なきと同時に亦我の「孝」を完全に言ひ顯すの語彼にあるなし。忠臣藏を英譯して英人は其真意の那邊に存する乎を知るに苦しむ、復讐は我に在ては徳にして彼に在ては罪あり、彼我思想の隔絶實に此の如し。

言語は思想の音聲又は字形に顯はれしものなり、故に人の思想に入らずして其言語を解する難し、而して言語を學ぶは其之に依て顯はるゝ思想を解せんが爲めなり、英語の ^{ラヴ} ^{ラヴ} ^{ラヴ} は日本の愛なりと知て未だ ^{ラヴ} ^{ラヴ} ^{ラヴ} の意義を悉したりと言ふを得ず、そはラヴと愛とは其之を作りし根底の意義を異にすればなり、Loveは ^{ラヴ} ^{ラヴ} ^{ラヴ} と同根の語にして「去る」「棄つる」を意味す、而して其變じて Believe (信する、任かす) なる詞を作るを見れば、自己を棄て他に任かすの意あらざるべからず、之を邦語の「めづ」に對照す

ればその自から異意義の詞なるを知るを得べし、「めづ」の意義を探ぐるは難し、或は「夜め出づ」の畧なりと云ひ、或はその「めづらし」「珍奇」となりて顯はるゝを見れば、「め」「目」より來りし詞あるやも計られず、然れども兩者孰れの根詞より來りしにもせよ其の英語の「ラヴ」なる詞とは全く異意義の詞なることは論を俟たずして明かなり、コロムウェルは彼の英國をラヴ(愛)したりと云ふを得べし、之を「めで」たりと云ふを得ず、我にコロムウェルの心なかりせば我は彼のラヴあるものを解するを得ず、故に宏量ならんと欲せば、外國人の思想を其最善最美の點に於て探らんと欲せば、吾人は外國語の深き精しき研究を要す、之を約言すれば彼の語を知らざるは彼を知らざる事なり、彼の語に通せずして彼と親密の交を結ばん事は殆んど出來得べからざることなり、外國語の智識より來らざる外交は表面的禮式に過ぎず、彼を信じ、彼

に信せられ、心情の深き奥底に於て彼と共に永久の平和を結ばんと欲せば、彼の語に通じ、彼の想を解し、彼の感を以て我が感となさざるべからず。自國の語のみに満足する國民は畢竟するに攘夷鎖國の民たるを免れず。

故に文明國に在ては外國語の研究は人士たる者の修養の最も肝要なる部分として認めらる。歐米の政治家、文學者、科學者は勿論、苟も普通智識を有する者と稱せらるゝ者にして自國の語の外に二三の外國語を操らざる者は稀なり。女王ビクトリヤが主なる歐羅巴語を用ふるに自由あるのみならず、又晩年に至て印度語の研究に従事し、梵語を曉得し、今や巧にヒンドスタニ語を以て彼女の宮廷に侍從する印度人と共に談するを得るが如き、故グラッドストーン氏が希臘、佛、伊、獨、西の諸語は勿論、八十歳の高齢に達してイブセン、ビヨンステルンの作をも彼等の

外 國 語 研 究 の 益 利

外 國 語 研 究 の 益 利

國語に於て讀まんと欲しスカンデナヴィヤ語の攻究に従事して、彼れ死せる前畧其目的を達せしが如き、或は故ビスマーク公が佛を語る流暢に、英米人の彼を訪ふれば彼等が彼の獨逸語を語り得るにも關せず、勉めて英語を用ひて彼等の友誼を惹きしが如き、或は今の露國皇帝ニコラス陛下が十八歳の時既に五ヶ國の語に通せられしが如き、實に歐米各國に在ては語學の研究は國交の基礎を作り、未だ標俎の一禮に及ばざる前に早く既に相互の國民的思想と感情とを悟り、以て善隣の好を完ふするを得るが如きは蓋し吾人東洋島國民の解し難き所なるべし。

余は曾て土耳其人某を知る、彼は希臘人にしてスリヤ國スミルナ港の人あり、彼の家は菓子製造を以て業とするもの、然るに彼は彼の土語と希臘語との外に能く英語を解し伊と佛とに通せり、常に余に語て曰く、余

の國に在ては菓子屋の小僧たりとも二三の外國語を知るを要すと、亦以て彼の見識の區域の吾人に愈る幾層倍なるを知るべし。近頃英人某の露國の西北隅ラランドに旅行せし者の記事を讀むに夫の歐洲僻隅の地に於てすら農夫樵夫が少なくとも三外國語を使用し得るを見たりと。丁抹人にして英と獨とを知らざるは稀なり、和蘭人にして英と獨と佛とを知らざるはなけん、露國人士は外國語精通を以て外交社會に有名なり、此智識ありて此外交あり、歐洲人が常に歐洲以外の國民を見るに異邦人の如き念を以てするは決して故なきにあらざるなり。

外國語の研究は愛國心を滅殺すと、噫、奇異なる反駁かな、英語に精通し、『マリア・スタチエアート』の名作を編みし詩人シルレルは愛國心に欠乏せし人ある乎、自國の語に優て獨逸語を愛せしカーライル其人は最も

明白に英國の文人なりし、殆んど佛文學に心酔せしフレデレッキ大王は今の獨逸帝國の基礎を定め、佛蘭西的風習と思想とを彼の本國より排攘するに最も力ありし人なり、福澤諭吉氏が彼の英語に精通するに依て日本國に盡せし功蹟は如何に偉大なりしぞ、國を愛せざる者こそ自國の文字をのみ以て満足すべけれ、國を愛し、日本國を以て世界の最大國と爲さんと欲する者は汎く海外の語に精通し、ダンテを彼の伊語に讀み、ゲーテを彼の獨語に查べ、沙翁を彼の多面ある英語に味ひ、セルペンテスを西語に解し、イブセンを彼の那威語に讀み、カモエンスのルシヤッドを彼の葡萄牙語に吟ずる野心を抱かざるべからず。

第二章 世界の言語に於ける英語の位置

人類の使用する言語の種類は千を以て數ふべし、印度一ヶ國に於てす

ら六百三十四種の言語は行はると云ひ、英國に於てすらゲリック、シムリックなるケルチック派の二語あるありて五六の土音を以て愛蘇威の三地方に行はる。國語統一の一點より推すときは日本程完全なる國は世界にあるなし。是れ我國の幸福にして亦或る場合に於ては吾人に不幸を來たすことなり。

言語學上の通則に依れば世界の言語を三種に大別す、即ち印度—歐羅巴語、セミチック語、チュラニヤン語是れなり。而して前二者は言語學者の該博なる研究の結果として今は其關係構造、來歴等稍々判然たるを得しと雖も、第三者に至ては臆說多出、以て完全なる類別法として見る能はず、故にチュラニヤンなる詞は前二者以外の者の總稱として稽ふるを可とす。

我が日本語の原因に就ては未だ世に確說あるを知らず、然れども其全

體の組織構造より稽へて以て歐洲語又はセミチック語に屬すべき者にあらざるは明かなり、ベシル、チャムパーレン氏は日本語はアルタイ語の一種なりと云ひ、アイザック、ツーマン氏は其文法の組織に於て土耳其語と類を同するものなりと論ず、而して最も大膽なる説は日本人は今を去る五千年の昔、西方亞細亞に於て埃及、バビロンと覇を争ひしヒッタイト人種の遠孫にして其國語は今尙ほ地名として彼地に存する非セミチック語の轉化せしものなりとの説あり。是れ加奈太の學者ジョン、カムベル氏の始めて唱道せし説にして、我國に二十年間滞在せし米人マカーチ氏の贊同を得、近くは松本君平氏が『史海』紙上に於て我が國の讀者に紹介せられし學說なりとす。然れども今や此説も亦轉覆され、ヒッタイト人非蒙古説の盛に行はるゝに至れり。然れども何れの學說に依るも、日本語を以て印度—歐羅巴語の一派と

見做すものあるを聞かず、シヨセフ エドキンス氏の天照大神の *Amaterasu* は彼斯語の *Mithras* より來りし者にしてゼンダアベスタ教の崇拜物を移せしものなりとの奇説の外、余は日本語とアリヤン語との關係を論せしものあるを知らず、故にアリヤン語の一支なる英語は日本語とは全く類を異にする語なり、吾人は土耳其、洪牙利、芬蘭土の諸語に於て日本語と語原的關係を發見するに至ることあらんも、英語又は佛語に於て日本語の痕跡を發見せん事は吾人の到底望むべからざることと信ず。又我が日本語に關係を有せずして、又英、佛、獨等の歐羅巴語と全く類を異にする語にしてセミチック語あり、是れザグロス山脈以西、亞拉比亞半島、スリヤ、パレスチナ、ゾソボタミヤ地方に行はれし語なり、中に希伯來語あり、猶太人の經典は此語に成る、其一派にアラメヤ語ありき、基督の使用せし言語ならんと云ふ。亞拉比亞語あり、幾多の俗音を以

て亞拉比亞半島に行はる。回教徒の聖經は此語に成り、斯教繁盛の時にありては、バグダッド、ゴルドバに時ならぬ文化の花を咲かせ、東は印度のデルハイより、西は大西洋の沿岸に至る造學者の言語として用ゐられ、今尙は跡を印度語、波斯語等に留めて一億五千五百萬の回教徒の聖語となりて存す。アツシリヤ語ありて一時は世界の言語たりき。バビロン語ありて今を去る四千年の昔、摩西約書亞の時代に當て、外交上の言語 (*Lingua franca*) として廣く西方亞細亞に行はれたり。カナン語ありてフィニシヤ人の言語として地中海の沿岸に普く、希臘人は彼等のアルハベツトを此語に取り、吾人が今羅馬字として我國に適用せんとしつゝあるものはカナン語より來りしセミチック語の遺物あるを知らざるべからず。斯く人類の進歩に偉大の効を奏せし言語なりと雖も、今の歐羅巴語とは全く語原を異にし、字格の構造より文法の規律に至るまで一と

して兩者の間に語原的關係を示すものあるなし。勿論歐洲人の宗教はセミチツク人の宗教を採用せし者なれば歐洲語にセミチツク語の採用せられしもの尠からず、英語のジョンは希伯來語のヨリアネスにして「神の賜の意」なり、ジエームスはイヤコーブにして「代人」を意味し、サムエル、シヨナサンは其儘原語より來りしもの、エリザベスは大陸語のイザベルにしてビゼベル(神を拜する者)より來る、其他 Sabbath (安息日) Seraph 等宗旨宗禮に關する語にして希伯來語より來りし者尠なからず。是れ恰も日本人がギヤマン、ビードロ等の語を和蘭語、西班牙語等より借り來りしと同じく、以て語原的關聯を示すに足らず。

印度—歐羅巴語の名稱は其地理學的區域を指示して明かなり、即ち東は錫蘭、恆河吐口より、西は大西洋岸に至るまで、開明人種の棲息地を貫通して行はるゝ同原的言語を總稱するの名なり、而して英語も其一支

にして喜麻拉亞山麓の梵語も南天竺の巴利語も均しく同部類に屬するものにして、金剛經、阿彌陀經、阿含經、大涅槃經を綴りし言語は書記春秋を編みし言語とは全く語原を異にすと雖も、パンヤンの天路歷程を作りて英民族の至る所に清黨時代の人生觀を傳へ、カーライルのコロムウエル傳となりて第二の聖書を同民族に與へし言語と其本原を同うするものなり。

歐羅巴全大陸、コーカサス、小亞細亞、波斯、アフガニスタン、ベルチスタン、並に印度大半島の大部分は此語の占領地なり、而して今や米濠の三大陸も其治下に屬し、亞非利加の南半亦之を迎ふるに至れり。新文明は此語に依て成立し、新思想は此語に依て發表せらる。若し文明を開始せしものはチユラニヤン語にして、是を維持し、是に新生命を吹入せしものはセミチツク語なりとせん乎、是を發揚し、是を完成し、是を全世界に願

布するものは印度—歐羅巴語といはざるを得ず。

印度—歐羅巴語、一名之をアリヤン語と稱ふ。アリヤン人種固有の言語なればなり。アリヤン Aryan はアリヤ Arya より來り「高貴」を意味す。毘陀經を編みし印度人祖先の稱號あり、スリヤン山以西に移轉せし者も此名稱を把持し、裏海以南波斯灣に到る一帶の高地をイラン (Iran) 高原と稱へ、之に住する民をエラン (Eran) 人種と呼びしも、亦アリヤ種族の此地を占領開墾せしに基因せずんばあらず。而して後數百千年を経て彼等の一派が西の方歐大陸を横斷し、大西洋岸の一美島に居を占むるや、之にアイルランド (Ireland) 即ちアリヤの國 (Arya-land) の名を附し以て高貴なる彼等の祖先の名號を傳へて今日に至れり。

印度—歐羅巴語 (アリヤン語) を區分すること左の如し。

一、印度語、印度の聖語なり、毘陀、婆羅門の二教を経て、高貴なる釋迦牟

尼の佛敎を作り、其經典に依て東洋諸邦に傳はり、涅槃、般若、波羅密等の詞となりて我日本語にさへ加へられしものなり。印度本地に於て其轉訛せしものに、巴利、ヒンダスタニ、マラチ、グゼラチ音等あるは前に述べしが如し。

二、イラン語、今の波斯語の根語なり。

三、希臘語、

四、拉典語、羅馬文明を作り、之と共に歐洲諸國に傳はり、純粹なる拉典文學として後世に模範を遺せしのみならず。今の伊太利語、佛蘭語、西班牙語、葡萄牙語等を作り、南歐諸邦に遍し。此等の諸語を總稱してローマンス語といふ。

五、ケルト語、一時はアルプス南麓ポー河岸並に佛國本土に行はれしも、今は歐洲西北部なる佛のブリタニー、英のウェルズ、愛蘭土、蘇格蘭

土等に跡を留むるのみ。

六、スラブ語、露西亞、保蘭土、セルビヤ、ブルガリヤ等東邦諸邦の語あり。

七、リスアニア語、露西亞の西部、バルチック海の東南岸諸邦、リスアニヤ、リゾオニヤ等に行はる。

八、チユートン語、左の三大區分あり。

イ、南獨乙語、ルーテル以來の獨乙語なり。

ロ、北獨乙語、英語の基原なるアングロサクソン語と和蘭語とは其支派なり。

ハ、ノース又はスカンデナビヤ語、アイスランド語、那威語、瑞典語等の系あり。

今若し英語の家系を定めんには即ち左の系圖の如くなるべし。

即ち英語は北獨乙語の一支にして、和蘭語の兄弟なり、獨乙語は叔父方に於て、瑞典語、那威語、丁抹語は伯父方に於て彼の從兄弟あり。露西亞語、塞維亞語、貌兒牙里亞語等は彼の大叔父の孫にして彼に取りては再從兄弟の地位に在り。伊佛、西、葡の諸語は彼の遠親にて再々々從兄弟に當る。

梵語、巴利語、波斯語、ヒンダスタニ語に至りては血縁甚だ遠しと雖も、少しく意を留めて彼と彼等との素性を窮むれば兩者の祖先を共にすることを見するに難からず。

希伯來語及び其他のセミチック語に對しては、英語及び其他の歐洲語は姻戚の位置にあり、兩者全く血統を異にすと雖も、後者が前者の宗教に歸依するに至りしが故に、其思想の傾向に於て、其表想の語調に於て、歐洲文學は深くセミチック化せられたり。ミルトンの失樂園は文を希

臘の古典に借りて、想を希伯來の聖經に採りしものなり。希伯來的豫言者に近世思想を注入してトーマスカールライルあり、其形骸に於てせずして、其精神に於て英語は確かにセミチック語の一派たるを失はず。希伯來語の研究が現今の英語を曉得するに當て尠からざる便益を吾人に供するの理由は、其近世に於ける希伯來思想の最大發表者なるが故に存す。

セミチック語に對して姻戚の位置に立つ英語は、蒙古、朝鮮、日本語等を以て代表さるゝ、亞爾泰語に對しては赤の他人なり。彼は我に於て言語學上何等の關係あるなし。彼の語體に於て、彼の文法に於て、彼の思想に於て、彼は我に取ては異郷、異類、異想の人なり。彼が我を學び、我が彼を學ぶの困難は實に彼我の間に存する此根原的差違に存す。英國の美術批評家クリストファー・ドレッツセル氏初めて我が横濱に上陸するや、氏

の感を述べて曰く、吾人若し今日直に他界に到るも斯の如き差違を目撃せざるべしと、我が國人の初めて歐米に遊ぶ者にして同一の感なき者は稀なり。其國狀に於て然り、其言語と思想とに於て亦然らざらんや。歐人の思想は到底翻譯を以て窺ふべからずとは前篇既に余の叙述せしが如し。英語を日本語に譯出するの困難は、熱帶地方の狀況を寒帶の人に傳へんとするの類なり。藤蔭瀾漫の語は後者に意味なきものなるが如く、結氷積爲山の句は前者の了解の外に在り、彼、我に來り、我、彼に往き、數年の久しき彼、我の眞情を探り謁して少しく互に相識るに至るのみ。吾人英語に曉通せんとするに當て、此忍耐寛裕の覺悟なかるべからず。

第三章 平民的言語としての英語

言語に貴族的なるあり、平民的なるあり、學者的なるあり、百姓的なるあり、我國の所謂や、まど、語の如きは主として貴族の間に耕されし言語にして貴族的なり、伊太利語の如きはダンテ、ペトラールカ、ボツカッチオ、等の學者に依て制定せられし言語にして學者的なり、所謂僧侶モンク拉典ラテンなるものは寺院的言語なり、毗陀經の梵語、コランの亞拉比亞語は今は全く宗教的言語なり、或は克服者の言語を其儘使用するなり、亞非利加北部諸邦に通用する亞拉比亞語の如きは是なり、或は優等國の文字を採用して其國語に代用するあり、朝鮮に於て支那文字の用ひらるゝが如し、然れども英語は其根本に於て平民的にして百姓的なり、佛蘭西語、西班牙語、伊太利語の如く優麗ならず、希伯來語、梵語の如く神聖ならず、希臘語、波斯語の如く微妙ならず、去りて亦獨逸語、スカンダナビヤ語、アイスランド語の如く舊時の規律に拘泥せず、伊太利語の調和を重んずる

に對して英語は實用を重んじ、支那語、日本語の敬禮的言語に當めるに比しては英語は甚だ粗畧なり、英語は音樂の語にわらず、又朝廷の用語に適せず、雅言の缺乏、禮語の貧約に至ては英語の如きは實に世界の言語中稀に見る處なるべし。
英語の始めてアングルス并にサクソンの蠻族に依て今の島土に移植されしや、官用語として三百年間の久しき其土族の中に尊崇されし帝王シーザーの拉典語は殆んど全く跡を絶つに至れり。
而して後七百年、ノルマンディーのウヰリヤムの征服する處となり、征服者は被征服者の上に強ゆるに佛蘭西語を以てせんことを努め、其法律、其儀式、其文學、其教育は總て海峽南岸の言語を以て行はれしに關せず、英國人は竟に征服者の言語を服用せずして、返て後者をして前者の言語に服従せざるを得ざるに至らしめたり、スチユアート王朝の佛蘭西

崇拜も、ハノーバー王朝の獨逸崇拜も少しも英國民衆の言語を左右する能はず、英語は平民の英語として發達し、終に下の爲す處、上之に習はざるを得ざるに至らしめたり。

一、英語の百姓的なるは其綴字法に於て見るを得べし、百姓は口傳を重んじて之を固守する者なり、彼等は事物の便益を認むるも容易に舊法を改めず、彼等は非常の不便を感せざる以上は舊を捨て新を取らず、英人が電氣燈普及の今日に當て尙ほ舊時の瓦斯燈に依倚するの理由も亦彼の百姓根性に由らずんばあらず、英語の綴字法の不規律なるは文士學者の一般に認むる處なるに關せず、英人の之を改良する能はずして昔時の不器用なる法に依るは笑ふに堪へたりと謂つべし、*reign* はレインにして *height* はハイトなり、*spade* はスペードにして *bade* はベードにあらすして *padding* なり、如何なる發音法に依るも *Gloucester* をグロスタ

一と讀むは難し、 *Worcester* はウオルセスターにあらすして *Worcester* たり、恰も *rooster* がルースターなるが如し、何故に *eight* をエイトと讀まざる可らざるか、實に英語發音法の氣儘勝手なる殆んど英語を稱して西洋の支那語となすに足らんと考ふるなり、獨逸語、伊太利語、西班牙語に比して英語の綴字法并に發音法の野蠻的なるは是を學ぶ者の何人も認むる所なり。

二、英語の平民的なるは其内に敬禮的并に階級的言語の甚だ妙きを以て知るを得べし、試に代名詞第一人稱 *I* (我れ) なる語を以てせよ、帝王が臣下に對し、臣下が帝王に對し、主が僕に對し、僕が主に對して用ふるに惟此一語なるのみ、貞節の妻が彼女の敬愛する夫に對して自己を指して語るに惟此詞あるのみ、罪過を悔ゆる罪人が全能全智の神に對して彼の悲痛を訴ふる時も惟此 *I* (我) なるのみ、然るに我が日本語に於ては、

主は僕に對しては「オレ」と云ひ、僕は主に對しては「ワタクシ」と述べ、或は「拙者」と云ひ、或は「妾めかけ」と云ひ、或は「身共」と云ひ、或は「此方」と云ひ、「手前」と云ひ、其他上者に對し、朋輩に對し、下者に對し、特別特種の第一人稱代名詞を用ひざるべからず、夫が妻に對して「ワタクシ」と云へば禮に過ぎたりとして無骨漢を以て評せらる、妻が夫に對して「オレ」と云へば不貞を以て責めらる、他人の妻は奥様と呼ばざるべからず、自身の妻は愚妻と呼ぶべし、共に是を「wife」と稱ふが如きは我國に於ては無禮千萬なり。

第二人稱に於けるも亦第一人稱に於けるが如し、國王に對し、公卿に對し、婢僕に對し、友人に對し、英人の用語に惟「you」(汝)の一語あるのみ、勿論王を呼ぶに「Your Majesty (陛下)」の語あり、公卿を呼ぶに「Your Excellency (閣下)」の語ありと雖も、對話應接の時に際して女皇陛下を呼ぶに單純の「you」(アナタ)を以てするも決して無禮ならず、上者に對し或は「御前」と云ひ「アナ

タ」と云ひ「旦那」と云ふが如き區別は英人の全く知らざる所なりとす、又我邦に於ける「御」の字の使用法の繁雜なるが如きは英語に於ては決して見る能はざる處なり、「御前ゴゼン」が午前ゴゼンに「御膳ゴゼン」を五膳ゴゼン召上ゴゼンて「御全ゴゼン」快遊ゴゼンばしたの聯語の如き英人に取ては解するに甚だ難き處なりとす、「御」の字は悉く敬禮的形容詞にして「召し上る」「啖くふ」の敬禮的動詞なり、「遊ばされ」は爲したなる助動詞の轉訛にして是も亦敬禮的文字なり、今若し通常の英人が此意を彼の單純なる英語に依て言ひ顯はさんとする乎、彼は左の如く言はんのみ、

My lord ate five cups of rice before noon, and he got well.

若し之を字義なりに英語に譯せん乎、即ち左の如きものならざるべからず、

My honourable lord honourably ate five cups of honourable

語英のてしと語言的民平

rice, and he got honourably well.

是れ英人の忍ぶ能はざるの虚禮的重復にして、彼は如斯の語調に對しては唯反抗嫌惡の表すべきあるのみ。
 三、英語の平民的あるは其内に平民的言語の多きを以て證するを得べし。故ビスマーク公曾て英語を評して曰く「英語に羨むべきの詞二あり、一は home にして二は gentleman あり、我が獨逸語に是に比對するの詞あるなし」と、ホームは英人特有の詞なり、之を獨逸語の das Haus と譯して其意の半をも通ずる能はず、日本語の家又は家庭にホーム獨特の意義なし、ホームは住家にあらざ、亦家族團樂のみにあらず、ホームに故郷の意あり、然れども故郷のみにあらず、家あり、友あり、親戚あり、是を圍繞する睦しき山あり、野原あり、我を保育せし小河あり、其岸に笑へる愛花あり、是等を悉く有して、而して是に加ふるに愛國の情と深き道念とを以てして

語英のてしと語言的民平

始めてホームなるものはあるなり、而てホームは宮殿壯屋にあらずして民家あり、詩人ウォルツオス特愛の題目は貧者のホームなり、ホイッチャーの歌ひし「Snow Bound」(雪籠り)は亦ホームの状態なり、英民族特愛の謠歌とはロバート・ハインの作になりし有名なるホームの歌なり

Mid pleasures and palaces though we may roam,
 Be it ever so humble, there's no place like home.

A charm from skies seems to hallow us there,
 Which, seek through the world, is ne'er met with elsewhere.

Home! Home! Sweet sweet home!

There is no place like home!

There is do place like home!

ホーム、ホーム、麗はしと麗はしとホーム、

世にホームに勝る所あるなし、
世にホームに勝る所あるなし、

之を house (住家) 又は family (家族) と云はずして home と云ふ、英民族は國の爲めに戦はずしてホームの爲めに戦ふことなり、彼等に取りてはホームは神聖なり、彼等の國家と宗教とは粹然として彼等のホームに鐘る。ゼントルマン亦英語特有の詞なり、之を紳士と譯すべからざるは余の前章已に述しが如し、ゼントルマンは貴族にあらざる富豪にあらざる、又必しも學者にあらざる、技藝の人にあらず、ゼントルマンはゼントルマンにして其正譯を他の國語に免むる難し、ウォルツオスの理想的軍人 (Chancellor of the Happy Warrior) はゼントルマンの鋒を執る者なり、サウジイの Sir Roger de Coverly 亦ゼントルマンの英國地主として現はれし者也、ゼントルマンに常職あり、義俠あり、禮あり、仁あり、宏度あり、若し我國の歴史に

於てゼントルマンの好例を究めんか、余の知る處に依れば北條泰時楠木正成は其好標本あらんと信ず、野卑の舉動なく、口は陋猥の言を以て汚さるゝことなく、心中常に他人の善を先にして自利自慾を後にす、コロムウエルの如き、ワシントンの如き、グラッドストンの如き、リビングストンの如き、彼等は政治家、軍人、宗教家たるに前だつて先づゼントルマンなり、眞正の英人は學者、軍人、教師、金持たらんよりは先づゼントルマンたらん事を欲す、夫のロングマン讀本第三卷に掲げたる The Four Nicols (四人のマクニコル) の小話の如きは能く貧にしてゼントルマンたりし者を讚せしの記事なり。

斯くてゼントルマンは平民的の語あり、即ち天爵的貴族の稱なり、一つの爵位勳章を有せざりしグラッドストンはゼントルマンにして大なるミズドハ (Mr.) たりし、Mr. Spencer, Mr. Carlyle あり、英民族は單純なるミス

トル(君)の稱號に無上の尊敬を呈す、大平民たるを以て最上の榮譽とする斯民にして斯語を有す、公の羨望決して故なきにあらざ。其他 *Lady* (普通貴婦人と譯す)の詞の如き、其語原は *half-veiling* にして「麵包を預かる者」の稱也、或は厨房の女主の意ありと云ひ、或は貧者に施す者の義なりと云ふ、若し前者ならん乎、平民の妻たるの意なり、若し後者ならん乎、貧者の食物を預かる者の稱なり、即ち *レディー* は盛裝、美服して民の尊從を仰ぐ者にあらざして、却て民を救ひ民を助くる者の稱なり、即ち英國の貴婦人は民の爲めの貴婦人にして、英國人は貴族貴婦人に貢を拂ふの民にあらざ。

英語の *King* (王)亦階級的の稱號にあらざ、*king* は *cunning* にして「爲し能ふ者」の意なり、(獨逸語 *König, Können* と對照せよ)即ち *king* とは能く治むる者、統轄し能ふもの、稱にして、野蠻國に於ては之を酋長と稱へ、共和

國に於ては大統領と稱ふと同一あり、即ち國家の頭梁、親方の意にして、先天的王者を指すの詞にあらざ。

若し夫れ平民的語類の長なる *independent* (獨立)なる語に至ては、是れ英人獨創の語あり、佛人は是を借りて彼の *independante* を作り、伊人、西人亦 *indipar-lente* を有すと雖も、始めて拉典語の *dependere* より此平民的大文字を作りし者は實に英人なりとす、そは十七世紀の始に當て清黨なる古今無類の純潔黨起り、信仰の自由と是に伴ふ國家の改造を唱へし時、彼等の大主張を言ひ顯はすに他に言なきを以て、爰に始めて *independence* (頼らず)なる新語を鑄造せしなりと云ふ、故に清黨の一派にして *エロムウエル* の率ぬし者を獨立黨と稱へり、彼等は最も高尚なる、最も深淵なる意味に於て獨立を唱へしなり、政治的獨立は彼等の第二第三の目的にして、彼等が生命を賭して獲んとせし獨立は實に宗教的獨立ありし、彼等は他

人の關涉なしに直に神に近づかんとせしなり、彼等は一人の眞價を認め、其思想を束縛するの勢力の神を除いて他に存すべからざるを主張せり、彼等は實に自由獨立を其根原に於て究めし者にして、後世彼等の有せし聖志聖望なき者が、單に政治的に他國又は他黨の羈絆を脱して以て獨立せりと思ふが如きは、獨立なる高尚なる文字の發見者の決して肯ふべからざる處なり。

ホーム、ゼントルマン、レーデー(Lord)貴顯なる語も同一の根詞より來る、キング、インデペンデンス、是れ僅かに其五六の例に過ぎず、英語は其本原に於て非常に平民的にして非常に平等的なり、此語を學ぶが爲めに如何なる思想の變動を我國に來すやは余の茲に語らんとする處にあらす、然れども英語を學んで其平民的の思想に感染せざらんとするが如きは、葡萄酒を飲んで其酒精を受けざらんとすると同一なり、若し夫れ英

語の供する自由平等思想なるものは佛語、伊語等の供する其ものと大に類を異にするの一事に就ては余は又別に述ぶる處あるべし。

第四章 英語の美

余は今茲に英語の美に就て語らんと欲す、然れども之を爲すは美は英語の特質なりと信じての故にあらす、余は前章既に英語の決して美的言語にあらざるを述べたり、若し美を以て語らん乎、我が日本語は確に世界の言語中最も美なるもの、一なり、獨逸語に獨逸語の美あり、梵語學者は梵語の精緻秀麗を嘆賞して止まず、希臘語の如き、伊太利語の如き、其美と麗とに於ては遙かに英語の上により、然れども英語には亦英語の美あり、而して余は今茲に英語特有の美に就て語らんと欲するのみ。

英語の美

英語は音樂的言語にあらず、然れども他の言語に於て發見し得べからざる一美音の其中に存するあり、即ち Beauty (美) に於ける U の音是れなり、是れ單に (ユ) と響かすものにあらずして、唇を締め、口笛を吹く時の状をなして發音すべきものなり。Duty (義務)、Mutual (相互) 等の詞は其意義に於ても、發音に於ても、英語特有の美を表はすものと稱ふべし。英語に支那語、伊太利語、西班牙語に於けるが如き分明なる鼻聲なし、而して鼻聲は發音上最も多くの美を添ふるものなり、伊語 *Ugnuolo* (鶯) の如き其發音に於て既に鶯を聞くが如きの感あり、然れども此は英語に於ても鼻聲の一種あり、即ち Bang (轟く)、Sing (歌ふ)、Song (歌)、Ring (鳴る) 等に於ては品は一種の鳴聲たるを失はず、殊に *ing* の熟音に音樂的興味最も多しとす、其相連続して一文章の中に現はるゝや、流暢清和稍々掬すべきものあり、是を左の一例に於て見ん、

But unto you that fear my name shall the Sun of Righteousness
arise with healings in his wings.

W を以て顯はるゝ *Ugnuolo*、*Ugnuolo* の音に又一種の美的音聲あり、*Willow* (柳)、*Weep* (泣く)、*Wish* (願ふ)、*Sweet* (愛らしむ)、*Sway* (揮ふる)、*Work* (勞働) 等の文字に、其意義に伴ふの異様の美音あり、特に W 音は S 音並に I 音と相連接して其特殊の音を發するものとす。

完備せる國語に於ては發音は語字の中に存する意義感動を發表するを要す、憤怒を言ひ顯はす語に怒聲なかるべからず、喜樂を意味する語に喜聲なかるべからず、而して英語の美は意義發音互に相適合する多きにあり、試に *ing* (鳴り響く) の語を以てせよ、其發音既に音聲的なり、是を正しく發音せんとすれば、リングの音に加ふるに鈴の鳴るが如き響聲を加へざるべからず、米國人の自由を讃するの歌に左の句あり、

英語の美

From every mountain-side

Let freedom ring.

是を譯して

谷より谷に涉りて

自由を響かしめよ

と亦すも ring(響く)の字に響聲を加へて歌はざれば其の真情を表し難し。

其他悪人を rogue と言ふが如き、悪事を wrong と云ふが如き、光線は light にして又「輕き」を意味し、jet は飛ぶにして音聲自ら輕薄なり、是れ勿論何れの國語に於ても爾りとする所かれども、英語の發音は能く其素質に適ふものなることは少しく之を究むる者の何人も發見する所なるべし。

英 語 の 美

英 語 の 美

然れども英語の美は其發音に於て在らずして其意義に於て在り、是を樂器に合して伊太利語、西班牙語の如く美音を發せざるも、是を心に思念して深淵測り難きの美あり、英語は畢竟するに謙讓、貞節の語あり、外貌に質素にして内裡に富饒なり、英國が數多の大詩人を出して一人の大音樂家を出さざるは亦其言語の然らしむる所にあらざるなき乎。余輩が英人の思想を我が國人に紹介せんと努むるに當て、常に困難を感ずるの一は英語の Sublime^{サブライム}なる文字の譯語なきに在り、高尚、崇高、莊嚴、一つもサブライムなる美的文字の譯語にわらず、或人サブライムに定義を附して admiration in terror と言へり、然れども定義其物が邦語に譯し難きの文字なり、震撼に於ける敬愛と直譯せん乎、是れ此文字を一層解し難からしむる者なり、或は之を莊美と譯したらんには少しく原意を通ざるに足るならんも、是れサブライムの譯字なるを知て後始めて通

するの意義にして、英語の一字を知らざる人に向て、ミルトンの『失楽園』は、莊美なりと傳へて余輩は讒言を傳へし之感あり、そはサブライムは吾人が全能者の前に立ちし時の感なり、摩西がシナイ山頂に天より直ちに十戒を授かりし時に四面サブライムなる光景を呈したりき。三日の朝に至りて密雲山の上にありき、雷轟き、電閃けり、又喇叭の聲ありて其聲甚だ高く、天幕に在る民皆震ふ、シナイ山は都て煙を出せり、エホバ火の中にありて其上に降り給へばあり、其煙竈の煙の如く立昇り、山皆震ふ、云云

是をサブライムなる光景とは云ふなり、コレリッヂがアルプス山下にマタホーンの雲表に聳ゆるに對し、人生の脆きと朝暾の前に消ゆる朝露の如きに比し、大嶽の巍々として天外に宿星と共に萬古を語るを思ひ、彼の有名なる『山に捧ぐる讚美』てふサブライムある篇は出でしなり、サ

ブライムを感せんと欲せば、自己の小と弱とを感ずると同時に絶對者全能者の無限大を感ずるを要す、此二者の感なき者にサブライムの觀念其物を傳へ難し。

次に詩人特用の語なるイマジネーションの文字に就て述べん、是を想像と譯して原意の一斑を窺ふに過す、勿論詞章聲律の術を謂ふにあらず、和韻應酬の禮にあらず、イマジネーションは creation (創造) の一種にして、詩人の業は造物主の業に類す、是を造像と譯して稍其原意を通ずるに足らん乎、即ち理想を具體的たらしむる作用を稱ふ、是を畫布の上に寫して繪畫あり、大理石の上に彫みて彫刻あり、是に言語的衣裳を着せて詩歌あるなり、英語に詩人を poet (造る者、希臘語の ποιητής) より來りし語ありと云ふと稱ふは是が爲めならむ、イマジネーションなる語を斯く解してこそウォルツオスの左の莊句を解することを得るなれ。

英 語 の 美

Imagination, which is in truth,

Is but another name for absolute power,

And clearest insight, amplitude of mind,

And reason in her most exalted mood.

インスピレーション (inspiration) の文字、亦譯し離き者の一なり、是れ曾て
 徳富蘇峯氏が英音なりに我國人に紹介せし言語にして、今やステーション、
 エンヂン等の語と均しく其儘日本語に採用されんとしつゝあり、
 或は之を『吹入』と直譯するとあるも是れインスピレーションの代語と
 して解するにあらざれば殆んど無意義の語といはざるを得ず、inspire
 是は勿論 E(入)れる (spire(吹く)の根字より來りしものに相違なし、然れ
 ども其今日の獨特の意味を有つに至りしは、深き宗教的理由の其中に
 存するあり、基督教の聖書創世記第二章七節に曰く、

エホバ神、土の塵を以て人を造り、生氣を其鼻に吹き入れ、賜へり、人即
 ち生靈となりぬ。

又同書約翰傳二十章二十一節に左の語あり

イエスまた弟子等に曰ひけるは爾曹安かれ、父の我を遣せし如く我
 も爾等を遣さん、如此曰ひし後、氣を吹きて、彼等に曰ひけるは聖靈を
 受けよ。

如斯にしてインスピレーションは全く宗教的言語なり、直ちに天の神
 に接し、彼より聖氣を受くるを稱ふるの語あり、我國にても時に或は「天
 來の思想」など云ふことありと雖も、英語の直覺的なるに比しては甚だ
 薄弱なる語なりとす。

インスピレーション時には點火又は燃燒を意味することあり、即ち一
 人の熱誠を他の人に傳ふるの謂なり、是を左の實例に於て見ん。

英 語 の 美

セラピム(天使)のひとり鉗をもて祭壇の上より取りたる熱炭を手に携へて我に飛び來り、我が口に觸れて曰ひけるは、視よ此火、汝の唇に觸れたれば既に汝の罪は清められたり。

(以賽亞六章六節)

昔時の預言者を稱して Fire-setter (放火者)といへるは是が爲めあり、即ち熱誠の火を放ちて迷夢の民を醒覺せし者を稱ふあり、モハメツドの如き、ジョン ノックスの如き、サボナローの如き改革者は、inspiner にして放火者なり、新生氣を吹入せしに止まらず、之をして國民の腐腐を燃焼せしめ、新市街が灰土の上に建設さるゝが如くに新國民を舊時の敗壞の上に造營す、インスピレーションは大風颶風の吹入にして國民を其良心の根底より吹き捲くるの語なり、或はパインスの田園歌に於てするも、或はバイロンの革命歌に於てするも、其改造的大原理を傳へ、社會を其最低地より改築する生氣を含むに至ては、等しくインスピレーション

英 語 の 美

ヨンの作といはざるを得ず。

英語の美は亦其 Mind, Spirit 及び Soul の三姉妹語に於て見ん、若し Mind は心と譯し、spirit は精神と譯し得べくんば余は第三の soul に附するに何等の支那文字を以てすべきかを知らざるなり、第一は主として soul の識認的作用を指すの語にして、第二は其情的作用を謂ふの語あり、然れどもソール其物を言ひ顯はすの語の吾人にあるなし、是を靈魂と譯して其内に明かなる個人格を發見する能はず、魂にあらす、魄にあらす、精にあらす、神にあらす、ソールはソールにして之を他の英語に譯すれば individual (indivisible) 即ち分つべからざるものなり、即ち心靈界のアトムにして、之を毀つ力あるなく、之を割くの利刀あるなし、即ち吾人各個の自由の存する所にして、人類たるの特權の付着する所を云ふなり、英民族の自由觀念は彼等のソールの定義より來りしものなり、彼等

英 語 の 美

英 語 の 美

の稱する個人主義なる者は、現今我國に於て傳へらるゝが如き利己主義を稱ふるものにあらずしてソール主義を謂ふなり、A MAN、人一人、永久不滅のもの、他人の干渉し能はざる我が心中の一物即ち自我其物、帝王にも宿りて亦乞食にも宿るもの、是れソールなり、人の人たるの眞價は彼の有するソールに在り、人命の貴重なるは其内にソールある靈物の宿ればあり、ソール、ソール、我に我がソールの特權を與へよ、然らざれば我に死を與へよ。

其他 Love(愛)は Leave(去る)にして我慾を去るの意なるか如き、word(言語)は worth(價)と同根の語にして之を口にするものの眞價を定むるの意なるが如き、virtue(徳)は vitus より來りて勇氣を意味するが如き、英語の美は其素質の道德的なるに存す、讀者は宜しく自ら研究を續けて其深奥の美を探るべきなり。

英 語 の 美

然れども國語の美は其單語にあらずして其編成せる文學にあり、最も高尚優美なる言語も之を卑陋猥褻の文學者に使用せられて其美を没し、其麗を汚さるゝは勿論なり、同一の單語を以て小島法師は彼の太平記を記り、今の小説家は彼等の女郎文學を編む、國民の腐敗は其言語を辱しむるものなり、優美なる言語わけて優美なる國民あるにあらず、言語は國民の製作物なり、我に大國民を與へよ、我は大國語を作るを得べし。

佛の文豪ヴォルテールや英文學を評して曰く、高尚なる道義を謠ひし者にして英國人の詩歌の如きはあらずと、總理フェアバンは小説家ウォルター スコットを評して曰く、スコットは英語を使用せし最大宗敎家の一人ありと、エマーソン曰く、余は他の物を取て詩を作るを得、然れども余をして詩人たらしむる者は道義の念なりと、英民族の大詩人大文學

者は概ね皆大宗教家大改革者なり、シエークスピヤ、ミルトン、ジョンソン、パーク、スコット、デッケンス、カーライル、テニソン、ロングフェロー、ローエル、ホヰツチャ、ホヰツトマシ、……是を英雄の連続と稱せずして何ぞ。文學は英民族の誇るに足る唯一の美術なり、繪畫、彫刻、音樂に於ては、英と米とは伊に劣り、西に劣り、獨に劣り、露に劣る。獨りホガースのあるありて、諷刺畫を以て世界的名譽を博せりと雖も、是れ彼の技術に由りしにわらずして、彼の慈善的着眼の高きが故なり、然れども其文學の豊富健全あるに至ては英國に匹敵すべき國はなけむ。余の是を言ふは英語は余の専究せし唯一の歐羅巴語なるが故にわらずして、是れ萬邦の識者が均しく是認する處なりと信ず。世界の三大詩人中、英國は其第一の者を有す、沙翁一人が一新世界あり、一個の脳中にかくも宏大なる思想の浮ひ交りしとは余輩の殆んど信

じ難き程なり、バイロンとウォルツオスとは正反對性の二詩人なるが如し、然れども少しく兩者の作を究むれば二者同一の動機よりして彼等の造像に従事せしを知るを得へし。後者は前者の鎮火して蘇國山水の景と化せしものなり、二者同じく火山性なり、其ソール中心の熱火を噴出せしに至ては一は他の者に劣る所なし、バイロンに於てエトナ、スピヤスの莊嚴を賞すへし、ウォルツオスに於て山中の湖面に宇宙の映するを見るべし。ジョンソンは處女の心を包むに熊の皮を以てせし者なりといひ、彼に一百年の成長を興へし者はカーライルなりとなり、簡潔にして海よりも深きはブラウニングあり、不器用なる英語をして希臘語的美音を發せしめし者はテニソンの作詩なりと云ふ。若し夫れ大西洋を渡りて新大陸の處女林に英民族の自由思念の發育せしものを窺はんとすれば、

ミシシッピー河邊の大平原よりも廣きフライヤントあり、清蕪的道義は最も高尚にローエルの筆に上り、人と自然とを其儘に寫して贅飾なきをロングフエローとなす、クエーカー詩人にして放火的なるはホッツチャ一なり、最も亞米利加的なるはホットマンあり、史は洋の東に在てはロバートソン、ギボン、マコーレー、グリーンあり、洋の西に在てはバンクcroft、プレスコット、モットレーあり、小説を愛する者にはデッケンズとサツカレーと、ジョージ エリオットとマクドナルドあり、共に健全にして女郎文學の類にあらざり、是等は皆英語を曉得して吾人の風となすを得べし、カーライルの筆に成るコロムウエル傳を讀み見よ、吾人は熱誠宏量、仁慈宇宙を呑むの大政治家たらざれば止まざるべし、グリーンの筆になりし英國史を繙き見よ、民の大なるを願ふて階級制度に堪ふる能はざるに足らむ、ウォルツオスのラオダミヤを讀んじ見よ、優にし

て勇ある男子は出てん、バーンスに彼の「ハイランド メリー」を聞き見よ、愛は肉情を去て春潭の清きが如くならん、來れ吾が友、來て此語を學べ、一仙境は諸子の前に供せられたり。

第五章 外國語研究の方法

吾人之を語學と稱するも言語は素是れ習慣にして學術にあらざり、故に完全に之を學ぶの法は是に慣るゝにありて、之を文法的に究むるに非ず、外國語研究の法は單に實習の一事に止まる。

若し文法的に研究せんと欲せば、我が日本語は世界の言語中最も困難なる者の一なり、外國人にして之を習得せし者は曰ふ、日本語を學ぶにハケ國の歐羅巴の語を學ぶの腦力を要すと、然るに吾人生れ乍らにして父母の唇より此語を耳にするが故に齡僅に六歳に達すれば、言語學

者を困しむると甚しき此日本語を難なく曉得するに至る、日本人にして幼少の頃より外國に滯留せし者は、外國語を練るに外國人の如くなるのみならず、亦日本語を學ぶに外國人同様の困難を感ず、又紐育、ボストン、君斯丹丁堡の如き各國民雜居の市街に成長する兒童は、齡七八歳に達すれば一ツの語學的教授を受けざるに早や既に伊、獨、佛等二三ヶ國の語を自然と解悟し得るに至る。或は富裕の家庭に於て兒童に外國人の僕婢を附して不知不識の間に外國語を學ばしむるの法あり、要するに言語は幼少時代に習練すべき學科なり、既に一個獨特の意志を備ふるに至りては之を曉得すると決して容易ならず、是れ是を學ぶに婦人が男子に勝る所以にして、男子廿五歳以上に達して一外國語に精通するは實に至難の業なりとす、小學時代に於ては愛國心發揚の法なりとて外人蔑視の風を養成せられ、中學時代に於ては義務的學科として

後漫なる教授法を以て僅少の語的智識を強ひられ、大學に入るも碌々外國文に成りし参考書さへも讀み得ずして纔に辭書に絶がりて印刷に附せし外國教師の講義筆記を半解し、漸くにして試験の關門を通過し得て、學士の稱號を胸に當て、社會に出づれば早や既に外國語の要ある亦く、世界の大事を探ぐるに僅に邦字新聞の載する記事を以てす。然れども彼れ時勢通を以て自ら誇る者も時には世俗の上に立たんと欲する野望の萌すありて、識を海外の書に求めんと欲するも、如何せん生來意を注がざりし蟹行文字、然かも學士となりてより以來數年間放棄せし外國語、慚悔今は身を賣むるとも再び初學となりて之を攻究せんとするの忍耐もなければ勇氣もなし、日月逝矣、歲不我延、嗚呼老矣、是誰之愆。

然れども日本は米國又は土耳其にあらす、吾人は單人種にして又島國

人種なるが故に、大陸諸邦に於けるが如く外人と接するの機會を有せざりし、英國人が語的不學を以て有名なるが如く、日本人の語的不學も亦其地理的境遇の然らしめし所と言はざるを得ず。絶東に國を成し、外人を迎ふるに僅かに五個の開港場に於てせし日本人が外國語研究に重きを置かざりしは決して怪しむに足らず。殊に之を導くに淺見虚偽の藩閥政府あり、爲政治家自身が解せざりし言語を廣く國民の上に施さんことは決して望むべき事にあらず、吾人がゲンテを彼の優麗ある伊太利語に解し得ざるは、是を吾人の罪と稱せんよりは吾人の境遇並に吾人の教育者の罪といはざるを得ず、我國の文部に大臣たりし人を見るに、或は漢學一方の故井上毅氏の如きあり、或は淨瑠璃を唄ふに巧みなりと聞きしかども、沙翁戯曲に精通すとは曾て聞きしとなき芳川顯正氏あり、或は農、法、海、陸、孰れの省にも大臣たり得る多能多技の西郷從

道氏あり、或は黃海に支那の艦隊を殲せしも牛津又はケムブリッジに於て數と經とに勝敗を争ひしことなき樺山資紀氏あり、是等文部大臣ありて日本人今日の外國語的不識あるは決して怪むに足らず、弟子は其師より大なる能はず、國民は其文部大臣より博學なる能はず、盲、盲を導けば共に溝渠に陥る、吾人の不學は吾人先導者の不學に由るなり、外國語研究は至難の業なり、然れども努めて達し得ざるの業にあらず、余をして今茲に余の實驗せし注意七八を供せしめよ。

一、忍・耐・な・れ。吾人研究の結果の如何に大なるかを思ひ、阻碍に遭ふて失望すべからず、コロムブスは新世界を發見するの希望を有せしが故に二十余年間の貧と孤獨と苦痛とを忍べり、抱宇宙的のシエクスピヤと面前に談じ得ると思へば、四五五年の辛苦は決して忍び難しと云ふを得ず、ゲンテを彼の原語に於て賞味せんとするの慾望が幾多の後學者

をして伊太利語研究に従事せしめたり、イブセンの作を其原語に於て讀まんと欲して故グラッドストーン氏は八十五歳の高齢に達して那威語の研究を始め、彼れ死するの前稍々其難目的を達せしと云ふ。目的に伴ふの困難あるは何事に依らず然りとす。思想の一大新世界を發見せんとす、是に適合する困難なからざるを得ず。

二、通達を計れ。曉得せんとする外國語に對しては專領せんとする敵國に對する觀念を抱かざるべからず、即ち之を討平せざれば休まずとの覺悟是れあり。敵地に入て克服を全うせざる部分を遺すことは患を後日に遺すことなり。冠詞なり、前置詞なり、小は則ち小なりと雖も之を等閑に附して全部の透徹は決して望むべからず、先づ一部の討伐を全うするにあらざれば他の部分に侵入すべからず、一部の完全なる征平は全部の不完全なる征討に勝る、秀吉が關東に攻め入りしが如く、クロ

ムウエルが蘇格蘭を襲ひしが如く、寸地を争ふて先づ之を己が有に歸し、然る後に全軍を進むべきあり、語學の「ナマカザリ」程無益にして有害なるはなし、急がば廻はれの諺は語學研究に於て最も適切なるものなり。

三、發音を怠る勿れ。譯解は言語の半解に過ぎず、發音は言語の最要部分の一にして、正確に發音し得ずして其眞意を探ぐる難し、若し得へくんば外國教師の援助を求めよ、發音の正確は殊に初學の時に於て最も肝要なりとす。そは吾人は初めて學びし發音を終生持續する者なればなり、又發音の不正より折角學び得し言語を放棄するの危険あり、不調不諧の言語の到底永く吾人の樂み得べき所以なければなり。舊時の慶應義塾的譯讀法を以て英語を學びし者にして、今は殆んど全く之を忘却せし人の多きは全く之が爲めならざるべからず。

四、先づ四五百の單語を讀んせよ。是を一々紙片に書き附け、其裏面に譯語を附し、是を小函に入れて善く振り混ぜ、毎日一回之を取り出し、譯語を見ては正面の言語を憶ひ、原語を見ては其譯語を測る、斯くすると五六週間を経過すれば、吾人の腦裡に強固ある語的土臺の据ゑられしを覺ゆならむ、而して此等數百語の撰擇其宜しきを得ば、之を基礎として語字の全部を知るの手引となすを得べし、今試みに *Stake* (杖) *Stand* (立つ) *Station* (停車場) を學び得しとせん乎、三語等しく *st* を以て始まり共に「中止又は屹立」の意を含み、是を知て *Stay* (阻む) *Stable* (確立せる) *Stiff* (強勁ある) *Staff* (竿) *Stick* (杖) *Stack* (煙突) *Stump* (斷株) *Stem* (莖幹) *Statue* (彫像) *Statute* (律) *Stoic* (嚴格等) を知るに難からず、歐羅巴語の美は一を知つて十、時には二十、三十を知り得るに在り、少しく意を注いて之を究むれば三百の單語は演繹的に十有壹萬の英語を吾人に紹介するの手引

となるべし。
五、規則動詞の變活を熟誦せよ、動詞は實に言語の中心なり而して孰れの言語に於ても最も難きは其動詞なり、是を曉得するは敵の本城を奪ふことなり、而して是を攻撃するに裏面の副詞或は不規則動詞の變形よりせずして堂々正面の追手の規則動詞よりすべし、其征服に三ヶ月を消費するも決して時日の消失を歎ずる勿れ、本城を奪て之を毀ち、其殘墟遺礎を悉く我有に歸して甫めて我事終れりとすべし、余は語學研究者が意氣昂然、當るに敵なき猛勢を以て、冠詞、名詞、代名詞、形容詞、前置詞等に勝ち、旗幟を敵の外廓に立て、然る後二三回肉薄して本城に迫り、其堅くして抜き難きを見や、竟に失望して陣を旋し、全地を敵手に放棄するを目撃せり、動詞に接して語學者は更に一層の勇氣を鼓舞すべきなり、先づ規則動詞の首を刎ねよ、不規則動詞は攻めずして降らん。

六、毎・日・少・なく・も・愛・符・の・一・句・を・誦・ん・せ・よ、汝精神家なるか、左のリビン
グストンの一言の如きは是を諧じ置きて終生の益あらむ

A man seems immortal till his work is done.

人は彼の事業の就るまでは不滅なるが如し

此單句に九語あり、一々是を解剖して英語の組織構造等を知るの補助
となすをべし、若し時勢に激する所あらん乎、左の一句を作て之を紙上
に大書して吾人の悲憤を癒すも可あり、

Marquis Ito is a very stupid man.

伊藤侯は甚だつまらなき人なり

或は

Count Itagaki knows not what liberty is.

板垣伯は自由の何物たるを知らず

又は

Count Okuma can see, but cannot execute.

大隈伯に先見あり、然れども彼は之を決行する能はず

又は

Fooleries of the Japanese politicians are truly remarkable.

日本政治家の馬鹿々々しき事は實に非常なり

若し春陽の來復と共に天然の莊美に打たれん乎、テニソンの左の一句
は詩的、語的兩つながらに吾人に無盡の富を供するものならん。

Flower in the erammed wall,

I pluck you out of the eranny,

Hold you here in my hand,

Little flower, root and all,

And if I could understand

What you are, root and all, and all in all,

I should know what God and man is.

土塀の上に生ふ花よ

我は汝を手に摘み取れり。

微き花よ、根こそぎに

我は汝を我手に持てり。

根も枝も葉も皆な諸共に

我若し汝を解し得ば、

我は解せん、神をも、人も。

諸語は必ず文法の解了を待つを要せず、日々之を吾人の識量内に實行して、一には吾人に語的新智識を加へ、二には常に吾人の目前に外國語

研究の希望を供へて、吾人をして阻碍に遇ふも、蹉躓することなからしむ。

七、既に學び得し所を使用せよ、言語は科學に非ずして習慣なれば、之を完全に解する法は是を實習するにあり、是を知て之を使用し、是を書籍に讀んで是を筆に現はし、口に語る、讀むのみは言語通解の道にあらす、是を書き是を話し得るに及んで始めて是に精通せりと云ふを得るなり、讀むは易くして綴るは難し、否、能く讀み得るは能く綴り得し後にあり、即ち書き綴ることは讀み解することにして、能く綴り得ずして能く讀み得ると言ふ人は嘘を語る人なり。

記述の實習は單文を以て始むべし、即ち一つの主格と一つの動詞とを有する文を以てすべし、例せば

Marguis Ito loves womankind.

伊藤侯は女性を愛す

Count Itagaki repeats the same old story.

板垣伯は同じ古き事を反覆す

Count Okuma is no true friend of the people.

大隈伯は民の真正なる友にあらず

且又是を爲すに當て成るべく簡潔の文字を撰んで、長さ複雑なる語の使用を避くべし、例せば

Japanese noblemen are very idle.

日本の貴族は甚だ懶怠なり

此場合に於ては *idle* の文字は *indolent* (遊惰) *inactive* (不活潑) *useless* (無用) 等の語に優て、最も明白に最も力強く日本貴族の怠惰、無氣力、素養のなるを言ひ顯はすの語あり。

The Government and the Constitutional Party together rob the people of their scanty subsistence.

政府と憲政黨とは相合して人民の足らざる産を盗む

此場合に於ては *rob* (盗む) は最も簡潔にして最も適切なる語ありとす。 *plunder* (強奪) の文字は彼等が議院制度を利用して民を困しむるの秘密手段を言ひ表はすの語にあらず、 *despoil* (剥ぎ取る) は彼等が常に彼等の政敵なる進歩黨に就て用ふる語にして彼等の甘受せざる所なるべし、 *rob* 盗む、人民の財を絞る、下民の生活を難からしむ、即ち天より貴重なる職を盗んで、民より財と時とを盗む、 *rob* は甚だ強力にして亦た痛快なる語なり。

合成文は單文を充分に習得したる後に始むべし、例せば

Marquis Ito can never do much, because he knows not what life is.

伊藤侯は決して大事を爲し得ざるべし、そは彼は人生の何物たるかを知らざればなり。

是れ合成文にして二個の主格と同数の動詞とを含む、而して二個の短文を結び付くるに because (そは) なる接続詞あり、文法的に評すれば、幾個の單文を接続するも不正ならずと雖も、冗長の文は常に明晰を欠くの憂われば、成るべき丈け接続詞、關係代名詞、分詞等の使用を省くを可とす、例せば

Count Okuma is a very able statesman; but he being a lover of ease, and a pedant and puffer, can never command the respect and confidence of the people.

大隈伯は甚だ有爲の政治家なり、然れども彼ば贅澤を愛し、且つ識を誇り法螺を吹く者なるが故に彼は決して國民の尊敬と信用とを惹く能はず。

外 國 語 研 究 の 方 法

是れ決して悪しき文にわらず、然れども左の如きは更に一層明瞭なるあらむ。

Count Okuma is a very able statesman. But he loves ease, and is proud and talkative, and the people do not love and respect him.

八、執拗なれ、吾人は言語の使用を止めて之を忘るゝに速かり、久く故郷を離れて外國に留まれば自國の語さへも忘るゝに至る、矧んや外國語に於てをや、之を永久に保存せんと欲せば是を間斷なく使用せざるべからず、不撓と膠固とは語學研究の秘訣なりと知れ、林間に入りて大聲に愛篇を吟せよ、外國人に會せば未熟ながらも彼の國語を以て會話を試みよ、常に愛讀の一書を懐にして時々刻々閑ある毎に之を繙け、是れ單に忘却せんとする言語を保持するの益あるのみならず、吾人の腦力を鍛へ、是をして物に接して鋭く事に處して敏ならしむ。

外 國 語 研 究 の 方 法

語學研究は無用の時間を利用する最好手段なり、或は停車場に列車の到來を待つの時、或は人を訪ふて客室に長時間の俟待を命せらるゝ時、或は病者の枕邊に其睡眠を護る時、外字文典一冊は吾人に有益無害の樂を供するものなり。若し小説を讀むを廢して伊太利語を研究せしならば、若し眞偽相半する新聞の記事に長時間を費すを止めて英語か獨逸語かを學びしならば、日本人は今如何に進歩せる、如何に識量に富める、如何に常識に富める國民なりしよ、時若し金ならば何故に是を汚瀆の小説海に投ずるぞ、何ぞ是を國家の要に供せんが爲めに我身の研磨の爲に費さるゝ起てよ、愛國者、虚偽を綴りし政論と『愛國論』と小説とを火に投せよ、來て英、佛、獨、伊の文を究めよ、而して沙翁とパスカルと、ゲーテとダンテとに來れ。

第六章 日本語に現はれたる歐羅巴語

異種異根の言語を學ばんとするに當て吾人の取るべき一大捷徑は吾人の既に知得せし僅少の外國語を土壘とし、其上に新智識を築くに在り。歐人が日本あるを知て以來爰に七百年、然れども彼我根本的思想の相容れざると、地理的距離の隔絶甚しきとより二者言語の混合今に至るも甚だ少なく、彼は僅に我の「大君」「皇帝」等を採用して我の文物を遙察するに過ぎせ、我も亦彼を解せんとするに當ては寧ろ窮屈なる支那譯を撰んで單純明白なる原語を以てせず、爲めに彼我交通の頻煩を加ふる今日に當ても困難なる漢語の熟辭は日々に増加するも、歐羅巴語の直ちに入り來りて吾人の言語を肥すこと稀なり、舍密學なる語の反て原

語の意を保存するに適切なるに、化學なる殆んど無意義の譯語を製造して之に代らしめ、ランプなる便利なる原語に附するに、洋燈ある漢字を以てし、以て勉めて歐羅巴を遠けて支那を近けんとするは我邦人の一大偏癖といはざるを得ず、是を英人が直ちに我の「人力車」より *rickshaw* なる新語を作て彼の有とし、熟艾を *moses* と名附けて其醫語類集に加へ、日本語なりとの故を以て之に代ふるに新製の歐羅巴語を以てせざるに比して、吾人に少しく遜色なき能はず。

今大槻文彦氏の著「言海」を見るに、和語として採用されし者二万壹千八百十七、漢語一万三千五百四十六、和漢熟語三千有餘、而して外來語として收められし者僅に五百四十九、内九十六は唐音語にして支那的なり、百三十七は梵語並に南蠻語にして東洋的なりとし、三十二は琉球語、蝦夷語にして日本的なりとすれば、歐羅巴語として我日本語に加はりし

ものは實に二百八十四の少數にして、「言海」載する所の四萬餘語に對して僅に其百四十分の一たるに過ぎず、是を英語に南洋馬來語、米國土人の語、埃及語、亞拉比亞語、印度語、波斯語等の多く採用されしに比して、我が日本語の未だ地方的なるは疑ふべきにあらず、余は日本人が自由に支那語を採用せしの度量を以て、廣く世界の言語を其國語に加へんことを望むものなり、國語は其單語を外國に仰いで決して壞滅するものに、あらず、吾外國語の輸入は其豊富を來たし、其活用の範圍を廣うし、是をして終に世界的大思想を顯述するを得せしむるものなり、日本人は其言語に於て未だ支那人の羈絆より脱する能はず、是れ吾人の思想の未だ支那的にして吾人の中より未だ抱世界的大思想の出でざる一大理由なりと云はざるを得ず。

歐羅巴語にして日本語に採用せられし者は主として物品の名稱なりと

す。梵語を除くの外は未だ無形名詞の吾人の通用語として採用されしもの甚少し。佐久間象山の所謂東洋の道德、西洋の藝術、精造さず、表裡兼該し、因て以て民物を譯し、國恩に報ゆ^ゆとは日本人最大多數の取り來りし^し而して今尙は取る^る方針にして、彼等が歐洲語を藉るに當ても亦此方針に則りし事は余の今列舉せんとする實例に照して明かなり。

一、カステラ、和蘭人より藉りし語なり、故に長崎は今尙はカステラの精撰を以て名あり、西班牙語の威力兩半球に跨り、伊太利の南半、來^{ライ}因^{イン}の河岸、悉く其君を戴いて王とし事へし頃、カスチロ人は西班牙武士の華として時の文明國到る所に迎へられ、民を壓し暴を施くの機關として良民の怖るゝ所なりし。時に和蘭に *Castel brood* (カスチロ人の麵包)ありし、權者の使用せしものとして上等社會の食品なりし。後和蘭人の手を経て我國に傳へられたり、故にカステラは壓制政府の遺物たるを知るべ

し其味の佳なるは其三百年間の長き北歐の民の自由を奪ひし歐洲西南人種の甘手段を示すものなるを知れ。castelは英語の castle (城砦)にして、カスチロ地方は西班牙の東南部に當り其邊境に城砦多きが故にかく名付けられしなりと云ふ。

二、ピストル、是れ亦壓制的器具の名稱なり、英語の pistol にして短銃を指す、伊國タスカニー州ピストイア府の名より來る、此銃の初めて其府に於て製造せられしが爲めなりと云ふ。Pistoia は詩人ダンテの故國フロレンスの城市より西北二十哩の所にあり、オムプローテ川に傍ひ、中古時代に在てはルツカ、ビーサ、フロレンス等と政治に、製造に、商業に、覇を争ひし一共和市なりとす。ピストルとダンテ、争鬪と平和、是を聯想して之を記憶する易し。

三、ビードロ、は西班牙語の *vidio* より來りしに相違なし、拉典語の *vitrum*

に起る、英語の vitreous (透明なる) vitrification (硝子製造) 及び virid (硫酸) は皆同根の詞なり。
 四、コンペイトウ、是れ亦甘手段を以て北歐の民を歴せし西班牙人の語なり、葡萄牙語に之を confito と云ふ、蓋し其直ちに日本語に採用されしものなるべし、之に金、米、糖なる支那文字を附して其何物たるかを示し難し、コンペイトウは多角を装へど而も一度之を口舌の上に置けば溶解し去て僅に一時の甘味を覺ゆるのみ、恰も薩摩武士の武骨なるが如く、見えて謀計に巧なるが如し、英語の confect (砂糖漬) confectionary (菓子屋) はコンペイトウの姉妹語なり。
 五、ギヤマン、是亦虚飾外装品の名なり、蘭語の diamant より來りしなりと云ふ、今は玻璃硝子の類を指すに止まると雖も、原語に於てはダイヤモンド (金剛石) として寶石の王の名稱なり、拉典語の adamantis より來りし

者なり、英語の diamond の外 adamant, adamantine (堅牢なる) の語を作る、ギヤマンの語は今は華美光彩ある毀れ易き物品の名として使用さる、眞物悉く去て偽物社會に横行するの今日、ダイヤモンドは化してギヤマン (硝子) となり、單に燦爛たるを以て高貴を装ふに至りしは奇と謂つべし。
 六、ピロッド、又西班牙語なり、veludo より來る、英語の velvet, velveteen と同根の語なり、天鵝絨と譯す。
 七、デッス、是れ日本語に採用されし形以上の歐羅巴語の單一のものといはん乎、天主なる支那字を附するも是れ其音譯にして意譯にあらず、拉典語の Deus にして、同語の Dies、伊太利語の Dio、希臘語の Theos、梵語の Dyauṣ、アツアン人種の言語にして此語を留めざるは稀あり、共に天又は神を指すの語なり、毗陀經の Dyansh-pitar は Zeus-pater となりて希臘語に現はれ、Dies-piter 或は Jupiter として拉典語に存し、父なる天、又は天父を意

味す、deity(上帝)deism(自然教)、deity(神を崇むる)等の語は皆語原を天^{デウス}主に
取りし者なり、又希臘文字よりtheology(神學)、theophany(神顯)、theocracy(神政)
等の語は來れり、天主教堂上十字架標の高く聳ゆるを見てアリヤン民
族古今六千年間に渡る思想の變遷を考ふべし。
八、シチン、縞紵の漢字を附す、葡萄牙語の setim より來りしものならん、英語
の satin にして、拉典語の seta(絹)より來り、setaceous(細毛ある)、setiferous(同)
setigerous(同)等の植物學的術語と語原を共にす。
九、シヤボン、佛蘭西語の sabon より來りしものならん、日本音に最も善く
似たるはゲリク語の sabun なり、英語の soap も其語原に於て異なるこ
となし、佛音の sabon は英語の saponaceous(石鹼質の)、saponify(石鹼化する)等に於
て現はる。
十、ドンタク、休日の意味を以て維新の初期に在て廣く用ひられし語な

り、和蘭語の zondag、獨逸語の Sonntag、英語の sunday にして日曜日なり、歐羅
巴諸邦に於ては日曜日は徳性修養の日なり、故に伊太利語に於ては是
を Domenica(主の日)と稱し、特に天主に事ふるの日と定む、是を休日と譯
し、放散遊興の日と定めしは西洋文明を皮相的に解する日本人に限る。
其他カルタ(carta西)カッパ(capa西)シンシンビヤ(ginger beer 英)印度語の
zinziber より來る)ダース(dozen 英)、マッチ match 英)ボタン(boton 葡)ボンチ
(punch 英)コロッブ(corn 英)等、是を其原語に讀んで歐洲語悟得の一助と
なすを得べし。
然れども是等少數文字は以て彼の思想を解するに足らざるは余の前
に述べしが如し、瑣々たる小間物商の用語以てミルトンの莊とシエク
スピヤの大とを視ふに足らざ、何ぞサブライム(莊嚴)を採用せざる、何ぞ
自由黨の墮落と共に全く其本義を失ひし自由なる贅語を廢してクロ

ムウエル、ツシントンの口頭に上りしリバーチー其儘を適用せざる、イマシキーション、インスピレーション、若し假名文字を以て是を綴るの煩を感ずるならば何を直ちに羅馬字を採用して我が國語の同化力を増大せざる。

Sublime naru Fuji yo, ware nanji wo nozonite waga kokoro uehimi ugekū.

Ware ni Cromwell no liberty wo ataeyo, ware ni Wordsworth no inspiration wo.

Kudaseyo; ware wa imagination no tsuhasa ni noite, Dai Nippon no mirai wo

utavam.

是れ解し難きの日本語にあらず、斯くて世界萬國の語を我に吸収し、如何なる莊大の句も、如何なる深遠の思想も、是を自由に日本語を以て叙述し得るに及んで、日本國は始めて世界的に大なるを得るなり。

第七章 博言學と地名

固有名詞は素是れ普通名詞の特別化^{スペシヤライズ}せしものなり、正當に之を解すれば名詞として固有性を帯びざるはなし、名詞は名稱にして一物を他の物より區別する爲めの詞なり、花といふは葉に對し、幹に對し、根に對し、植生の一部分を指すの詞にして、花なるが故に葉にあらず、幹にあらずるの意を示すの詞あれば、是を固有名詞と稱して憊なし、名詞に固有と普通との區別あるは、その之を帯ぶる事物に小數と多數との別あるに依るのみ。

世界到る所に地名あり、而して吾人は其多くを解せざるを以て、地名としいへば吾人は意味なきものと悟り、單に之を諳せんことを努めて其原意を探らんとせず、故に地理學は記憶術練習の爲めの學科とし思はれ、困難の地名に接する毎に只瞑目して鸚鵡的に之を吾人の記憶に留

めんことを努むるのみ、是れ豈智能の發達を目的とする教育家の永く忍び得べき所あらんや。

地名は地理的固有名詞にして、其根原に於ては普通名詞なり。東京は東の京にして無意義無意味の夾雜的の文字にあらず、吾人は其名稱の依て來りし起原を知り、其名を呼んで其地位と歴史とを聯想す、北京あり、南京あり、西京ありて、亦東京あるなり、東洋歴史に通じて東京なる名稱は其意義炳然たり、外人の我國に來り、我國語と國史とを解せざるが故に此の最も明白なる我が帝都の名稱の意味を解するなく、之を Tokyo と綴り、之に トツカイオの發音を附するものあれば、吾人は彼の無識を嗤ひ、彼の狹識を憫むにあらずや、然れども吾人は他人を嗤ふが如く、他人に嗤れざらんことを努めざるべからず。

無學は迷信を生み、迷信は無謀を來たす、日本ある固有名詞の起因を明

にせざるより、我邦人の蒙りし害毒は決して尠からず、日本とは日光の貯藏所との謂にあらずして、單に日の昇る所、或は東方國の意に外ならず、是れ日本なる號の吾人の西方に住する民に依て此國土に附せられしものなるを以て知るべし、神皇功后新羅征伐の時に彼國王の言に曰く、吾聞東方有神國謂日本云々と、新羅、高麗、任那等朝鮮半島の諸邦より其東方に方る我邦を指して日本と謂ひしは地理的理由に止まり、尊敬又は敬服を意味して謂ひしにあらずは明かなり、今是を他國の例に照して説明せんに、亞細亞の東端地中海に浴ふ一帶の地を歐羅巴人はレバンド (Levant) と稱す、Levante は南歐語の levare (昇る) なる動詞より來り、太陽の昇る所即ち日本の謂ひなり、又マーモラ海並にエーシヤ海の間突出する小亞細亞の部分を今尙は古代の希臘人の名稱を存してアナトリア (Anatolia) と稱ふ、希臘語の anatolae (昇る) より來りし名にして

亦日本の義なり。近世に至て東洋全株をオリエンツト (Orient) と稱するも是れ拉典語の *ori* より來りし語にして亦昇るを意味す。埃地利 (Austria) は *Ostereich* にして東國の意なり。太古時代に在てはアツシリヤ王が東の方兵を進めて *Babylonia* の地に侵入せりとの事を記録に留めたり。而して *Babylonia* はスメラミヤ語にて日本山を意味する者なりと云ふ。依て知る日本なる名稱を帯びし邦土は我大八洲瑞穂國に限らざるを。

東方國あるが故に西方國あるは亦怪しむべきにあらず。ピツクニーに對してエロッパ國 (*Europa*) ありし、即ち今の亞拉比亞 (*Arabia*) 是れなり。東洋 (*Orient*) に對して西洋 (*Occident*) あり。前者は日昇國を意味して後者は日没國の謂ひなり。埃地利 (*Ostereich*) に對して今の佛蘭西あるゴール國 (*Gaul*) あり。前者は獨逸語の東方國にして後者はケルト語の西方國なり。英國の東部をウェールス (*Wales*) と稱ふも亦同一の *Gaul* 又は *Gall* の變稱

にして均しく西を意味す。日昇國なるが故に先天的に膨脹進取の國と謂ふを得ず。日没國なるが故に縮小退歩の國と稱ふべからず。日昇國に支那あり。朝鮮あり。安南あり。緬甸あり。日没國に獨逸。英吉利。佛蘭西あり。國名は國の大小盛衰を卜するものにあらず。

東方國あり。西方國あり。北方國。南方國。あからざらんや。那威 (*Nord*) は是れを英語に譯すれば *North way* にして北道。を意味す。我の北海道に對照せよ。印度の南半を *Decan* と稱ふは梵語にて南方の意なり。濠斯太利 (*Australia*) は拉典語の *australis* より來り。又南方を謂ふの語なり。東西南北の語之を萬國の語に讀んで許多の地理的固有名詞を作る。其意義の固有なるにあらず。其發音の特別なるに由る。吾人に取りて。吾人の識を博めて特別は變じて普通となる。是れ豈に獨り地名に於てのみ然らんや。

大川なる普通名詞を各國の言語に綴りて許多の固有名詞を作る、ミシシッピは米國土人の語にして大なる長き河の意あり、印度の恒河(Ganges)は Burra Ganga の節略にして、印度語の大河なり、イラワヂーは緬甸語(?)にして同一の意義を示し、ユーフラテス(Euphrates)はバビロン語の Puranna より來り、大水を意味す、西班牙語のグワダルキヴイル(Guadalquivir)は亞拉比亞語の Wad-al-Keber に起りて亦、大河の意なりと云ふ。白山の文字亦固有名詞として存する多し、我の加賀に白山あり、米國に White Mountain あり、シリヤに Lebanon(希伯來語)あり、印度に Dwalagiri(梵語)あり、端西に Mont Blanc(佛語)あり、アルプス(Alps)亦拉典語の Albus より來り、白山即ち雪山の意なりと云ふ。山なる普通名詞は我の比良蝦夷語のピラを作り、バルカン半島の Balk(土耳其古語)を作り、亞細亞の Taurus(亞拉比亞語)を作り、アンデス山を Cor

diellas と稱するは西班牙語にて連山の意なり、那威のベルゲン(Bergen)市は北歐語の Berg(山)より來り、新英州に惟一の倒扇形として嘆賞せらるゝ Wachuset も土人語にて單に山の意に外ならずと云ふ。灣又は港の名詞も亦固有名詞を作ること多し、我に森、大森、青森あるは皆蝦夷語の「モリ」の變形にして灣頭の意なりと云ふ。印度の孟買(Bombay)は葡萄牙語の Bon Bahia にして良灣を意味し、南米伯刺西のバヒヤ港は同一の Bahia なるに過ぎず、英吉利海峡に濱して佛蘭西に Le Havre あり、葡萄牙國デロー河口に Oporto あり、共に港灣を謂ふに過ぎず。砂漠を亞拉比亞語に讀んで Sahara あり、千島を馬來語に讀んで Maldivo あり、川中島を希臘語に讀んで Mesopotamia あり、米國土人の語に讀んで Nashua あり、我に山城國あれば蘇格蘭に Dunfries(ゲリツク語)あり、その Glasgow は我の黒谷と譯すべきものなりと云ひ、我の三河に對して歐洲

に Trois Rivières (三川) 米國に Three Rivers (三河) あり、英と蘇とを分つに Tweed (境川) あれば、蘇津と播磨とを別つに境川あり、フオルモサ(臺灣)は美を意味して伊國の Pincenza 露西亞の Balaklava と同意義なりと云ふ。英國の Oxford を牛津と譯し得べくんば、歐と亞とを區分する海峡 Bosphorus も亦同一の譯語を附し得べきものあり。種ヶ島は蝦夷語の「タンチ」島にして長島の意なりとすれば、之に比對するに米國に Long Island あり、種ヶ島の西方に方りて屋久島あり、是れ同じくアイヌ語にして鹿島の意なりといへば英國に Denham (鹿村) Derby (鹿町) Deerhurst (鹿森) 等ありて、英人亦彼の地名に於て大にアイヌ人に負ふ所あるかと怪まる。

地理的固有名詞、特に都市の名に宗教的名稱多し、世界の最も古き城市の一はユーフラト河邊のバビロンなり、Babylon は Babilin と綴るべきもの、スマラニヤ語の KA DINGIRRA NI をマッシュリヤ語に意譯せしものに

して神の門の意なりと云ふ。今を去る六千年以前に於て既に西方亞細亞の宗教的中心なりし、其の北方アッシリヤの地に於て莊大を極めしニネベ(Nineveh)の市はニナス(Ninus)の神を戴きしを以て斯く名附けられたり、希臘の雅典は女神アセキの名に依て建てられしもの、埃及古代の城市にして Ramesses の如き Tap-pis (Thebes) の如き、宗教的あらざりしは稀なり、然れども近代に至て最も多く宗教的名稱を用ひし者は西班牙人なりとす、彼等が西半球に殖民地を拓いて以來、國として、州として、島として、岬として、港として、都府として、其名稱に於て西班牙人種の宗教心を表せざるもの尠し、コロムブス初めて大洋の西に陸地を見るや、是に San Salvador (聖救主) の名を奉りて彼の難航路の恙なかりしを謝し、ニカラガ國の東北端に神に感謝岬(Capo Gracias a Dios)あり、其南に盡きる所は聖約翰港(San Juan)なりとす、コスタリカ國の首府を聖ヨセフ(San Jose)と云ひ、聖

救主國(San Salvador)ありて其首府に聖救主市あり、墨西哥最大の港灣は Vera Cruz にして眞十字の意なり、我に對する桑港は聖フランシスコ港にして是に接して聖ヨゼフ市(San Jose)あり、San Pablo は聖保羅にして、Sacramento 河は聖餐河なり、若し夫れ西印度諸島に至れば恰も寺院國に至りしごとき感あり、玖瑪島の南端に十字架岬(Capo de Cruz)あり、その西端を聖アントニオ岬と云ひ、ハイチ島に聖マヤリ岬あり、基督山(Monte Christi)あり、日曜島(Dominica)あり、聖母群島あり、基督教市(Christianstad)あり、聖路可島あり、三位一體島(Trinidad)あり、亦南米諸邦に此種の地名多し。

西班牙の護神とも稱すべきものは實に聖雅各なりとす、傳説に依れば聖雅各パレスチナの地に於て虐殺せられし後、彼の遺骸は不思議にも西班牙國西北の地に移され、此所に彼の軀は葬られて其上に大寺院の建

てられし以來、彼は西班牙人の守護の聖者として尊崇せられ、西人がカムボステラの聖雅各(Sant Jago de Compostella)の名を仰ぐは、恰も我國に於て善光寺の如來、成田の不動尊が民衆特種の崇敬を惹くが如し、故に西人は到る所に此聖者を祭り、聖雅各(Santiago—Sant Jago 英語の Saint Jacob or James あり)の名を留めたり、其著名なるものを擧ぐれば玖瑪島のサンチャゴは米西戦争の際其附近に於ける海陸の激戦を以て名あり、智利のサンチャゴは其首府にして南米第一の都市なりと稱せらる、其他サンチャゴ州あり、サンチャゴ島あり、西人の愛國心と宗教心とは籠めて此名に存す。

斯くて地名に歴史あり、詩歌あり、宗教あり、愛國心あり、地名は鄭重に攻究すべきもの、漫に變更すべきものにあらざ、洛北の嚴嶽比良をアイヌ語のピラ(山)と讀んで幾多の感慨の是を望んで吾人の心中に湧起せざ

るを得んや、憐むべきアイヌ人種、今は大和人種の逐逐する所となりて、纔に北邊に人種的餘命を保つと雖も、一時は琵琶湖の八景は彼等の有に歸し、堅田に獵し、勢田に漁し、遙に北嶺の白冠を戴くを望んで彼等の悲痛を慰めしならむ、否な、更に南方に進んで肥後鹿兒島の地を領し、南海の三島を命名するに其長方形なるものをタンキ(種子ヶ島)と稱し、其鹿林を以て茂れるをヤツク(屋久島)と呼び、其火山質にして硫黄を産せしをユーラップ(永良部)と名つけし頃、は實に彼等最盛の時代にてありしからむ、其時未だ肥後人の此樂土に侵入し來りしなく、阿蘇は火烟を噴出せしも巧言を吐かず、薩摩に誠實の民は住して虚偽の新華族の其淨土を穢せしなし、地名を其原語に讀んで吾人は太古老白の時代に溯り、今を憤ると共に吾人の悲憤を過去の清閑に癒すを得べし。然るに政治家なる者あり、卑俗にして亦無學、彼等は自國の地理に暗し、

矧んや萬國地理をや、文を貴はずして錢を尊び、神を拜せずして魔に事へ、詩歌の美を知らず、愛國心の何物たるを解せず、故に彼等は地名を見るも其意を解せざる事、恰も蠻人が聖賢の書を開きし時の如し、新地名を作らんと欲するに當て拉典民族が彼等新設の城市を Rome (羅馬) 強健を意味すと命名して彼等遠大の志望を後世に傳へしが如き、又は猶太人が彼等の首都を エレサレム (平和の在る所) と號して黄金時代の到來を豫期せしが如き、勇壯にして又サブライムなる思念の政治家てふ是等凡骨の頭腦に湧き來るなく、豊島郡と多摩郡とを合して豊多摩なる新名を作り、標葉、檜葉の二郡を合せしものに双葉なる平凡的新稱を興へ、森山、徳江、栗野の三村を合併して森江野なる奇名は起り、三村各其舊名の消滅せんことを惜んで其保存せられんことを争へば陸合村なる彌縫的名稱を附して其不満を宥む、是等政治家なる者が過去を輕んじ

國史を毀損すると實に此の如し、彼等は實に此美國を委ぬるに足るの
人にあらざ、吾人は宜しく彼等に倣ふことなく、博く言語の學に涉らん
ことを努め、地名に古人の希望を読み、萬國の民を解し、敬虔にして該博
なる思想を養成すべきなり。

参考書 ウェブストル氏大字典、マイケルソン氏比較地理、セイムス氏ア
ツシリヤ學、バツゲ氏パピロン史、ローリンソン氏太古七帝國史、ヘール氏
四班牙史、ラゴーション氏印度史、チャムパーレン氏アイヌ語と地名等。

第八章 最良の英語讀本

(英譯聖書)

最も簡潔にして、亦最も高尚にして、最も純潔なる散文と最も莊嚴なる
韻文とを雜へ、唯一書にして、其中に英語の粹を収めしものは余は英譯

聖書なりと信ず、余は今茲に聖書の傳ふる教理の眞偽善惡を論せんと
欲する者に非ず、亦審美的に其記事を辯護せんと欲する者にあらざ、余
は唯英語學者として、英譯聖書なるもの、純文學的に無比の價值を有
するものなる事を辯せんと欲す。

英譯聖書に數種あり、其目下書肆の店頭に曝され、一千ペーシの大冊も
僅に二三十錢を以て購ふを得べく、若し之をバツクル、スベンサーの著
書に比すれば十以て一を購ふに足らざる者は實に「ジェームス王の翻
譯」と稱せらるゝ者にして、英王ジェームス第一世の庇保の下に、五十四
人の碩學の手に依て千六百十年に希臘希伯來の原語より新たに英語
に翻譯せられしものなり、是に先走る七十餘年、千五百三十八年上梓の
コバーテールの譯あり、千五百二十六年のテイन्दールの譯あり、其他
ウイクリフの譯アツデルムの譯等ありて、其文體の中古的なるより今

口之を讀解するに稍や困難を感せざるに非ずと雖も、而も今日吾人の有する英譯聖書(シエームス王の翻譯)の特種の美は是等先達者の氣と文とを適用化合せしに依らずんばならず、其の後近世に至て改正翻譯(Revised Version)なるものあり、英米大學者の團體が十數年の刻苦を経て譯出せしもの、其原文の意を寫すに舊譯に勝るところ多きは言を待たず、又デューエーバイブル(The Douay Bible)と稱し、前述シエームス王の翻譯と同時に天主教徒の手に依て佛國デューエーに於て譯せられし英文聖書あり、今尙は英國天主教徒の尊重する處のものあり、亦近來に至り、英米在住の猶太人にして英譯聖書なるもの、孰れも正確のものにあらざるを歎じ、猶太譯の英語聖書を世に公けにせし者尠からず、其中余の常に参考用として尊重するものはアイザックレーザー(Isaac Leeser)氏の英譯舊約聖書なりとす、氏は單獨事業として十八年の星霜を其のた

めに消費し、吾人英文を以て此舊記を究めんと欲する者の爲に偉大の便益を供したり。
然れども純文學的には是等數種の譯文を相比對せんにはシエームス王の翻譯なるもの、他に優る數等あることは何人も承認する處なり、是れ實に英人の宗教心が其絶頂に達せし時に成りしもの、若し之を言語學的に、文法的に評すれば、過誤缺點一にして足らずと雖も、其能く預言者の精神を傳へ、保羅約翰等初代基督教徒の信仰を寫せしに於ては今日世に存在する三百有餘の翻譯聖書中、此英譯の如きは他にあらざるべし、英譯聖書は實に一種の創造的製作物あり、若し之を譯書の類に加へんとすれば、是れ精神譯として存すべきものにして、正譯と稱すべきものにあらず、英人は彼等の英譯バイブルに於て彼等獨特の聖書を有するなり、即ち猶太思想を英吉利化せしものを有するなり、彼等の個人

的希望と國家的理想とは疑て此譯文と成り、永く彼等の中に存し、彼等の國民的文學の長として彼等を教へ慰め導きつゝあり。
 今英譯聖書(シエームス王の翻譯を謂ふ)以下倣之より、純清なる英文五六の例を擧げんに、

And the Lord God said, It is not good that the man should be alone; I will make him a help meet for him... And the Lord God caused a deep sleep to fall upon Adam, and he slept; and he took one of his ribs, and closed up the flesh instead thereof. And the rib, which the Lord God had taken from man, made he a woman, and brought her unto the man. And Adam said, This is now bone of my bones, and flesh of my flesh: She shall be called Woman, because she was taken out of man. Therefore shall a man leave his father and his mother, and shall cleave unto his wife: and they shall be one flesh.—Gen. II, 18, 21—25.

エホバ神言ひ給ひけるは、人單獨なるは善しからず、我彼に適ふ助者を彼の爲に造らんと... 是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ、睡りし時其肋骨の一を取り肉をもて其處を塞ぎ給へり、エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を造り之をアダムの所に携れ來り給へり、アダム言ひけるは、是こそは我が骨の骨、我が肉の肉なれ、是れは男(man)より取たる者なれば、之を女(woman)と名くべしと、是故に人は其父母を離れて其妻に合ひ二人一躰となるべし、是の英文中に一の希臘語又は拉典語より引き來りし難語あるなく、皆な簡易單純なる英語にして何人も之を解するに困難を感すべきに非ず、殊に man(男)より來りし者あるが故に woman(女)と名くべしと譯せし處、希伯來語の אִשָּׁה 女なる語は אִישׁ 男なる語の女性あるを寫得て妙なりと謂ふべし、英人の夫婦觀なる者は實に彼等の此譯語に依るものにし

て其 shall cleave を好合(絶る)べしと命令的に讀みし處は原語の意味を正當に譯せしものとは稱すべからざるも、而も彼等をして夫妻の關係に非常に重きを置かしめ、是を犯す者は實に社會組織を其根底に於て動かすものあるの念を彼等に與へしに於ては、彼等の此聖語の解釋が與て力あるは決して疑ふべきに非ず、勿論生理學的に此記事を批評して妄誕無稽の譏を免れずと雖も、詩歌的に之を解して、其中に微妙深遠の眞理を發見するに難からず、夫妻とは一物を兩斷せしものなりとの觀念……瑞典國の神秘的哲學者スヰーデンボルグが未來天上の結婚式なる者を想像して、是れ造化の始めに當て一時相分離せし靈が再び相互に歸合する時なりと云ひしは實に此美はしき思想を畫きしものならざるべからず。

ダビデ王が其子アブサロムの死を歎くの辭は人情其儘を穿て常に英

人の愛誦する處なりとす。

O my son Absalom! my son, my son Absalom! would God I had died for thee, O Absalom, my son, my son! — II Samuel, XVIII, 33.

ア、我子アブサロムよ、我が子我がアブサロムよ、嗚呼我汝に代りて死にたらんものを、アブサロム我子よ、我子よ、

是を重複と云へば云ふべし、然れども親たる者が其子の叛逆に遇ひ、命を危うし位を奪はれんとするの際、其子の非業の死を遂げしを聞き、之を悲むの狀、古今東西の文學に、ダビデ王の此悲號に優るの痛聲は余の未だ知らざる處あり。

時勢を慨し、腐敗を憤りし言にして猶太預言者の語の如きは萬國無雙なるは、識者の夙に認めし處なり、而して其悲憤慷慨の意を寫せしものにして英譯聖書の如きは亦他に見ざる處なり、十七世紀の始めに當て

國民舉てスチユアート王朝の腐敗を怒り、ミルトンをして彼の大政論を吐かしめ、ピム、ハムブデン、コロムツエルをして彼等の果斷なる改革を行はしめしものは實に英譯聖書之力なりとす。後ウエズレーの宗教改革となり、ウイルバークフォースの奴隸廢止運動となり、ハワードの監獄改良事業となり、コブデン、ブライトの政治運動となり、カーライルの火の如き文字とあり、デッケンズの慈善的諧謔となりし者は實に英譯聖書に依て英人に染傳せし猶太思想なりと云はざるべからず、英譯聖書を取除いて英人の歴史は解し得べからず、彼等の憲法は聖語其儘を用ひ、彼等の詩歌美術は其重なる題目を聖書の記載する事實に求め、彼等の社會改良運動なるものも此書に關聯せざるは稀なり、若し短刀直入以つて俗人の膽を剋ぐるの文を見んと欲せば預言者亞摩士アモスの言は劍戟氷の如きものなり、

Ye that put far away the evil day, and cause the seat of violence to come near, that lie upon beds of ivory, and stretch themselves upon their couches, and eat the lambs out of the flock, and the calves out of the midst of the stall, that chant to the sound of the viol, and invent to themselves instruments of music, like David, that drink wine in bowls, and anoint themselves with the chief ointments: but they are not grieved for the affliction of Joseph.—VI. 3-6.

汝等は災禍の日を以て尙ほ遠しとなし、自ら象牙の牀に臥し、寢臺の上に身を仰し、群の中より羔羊を取り、琴の音に合せて歌ひ噪ぎ、大盃を以て酒を飲み、最も貴き香油を身に塗り、ヨセフ(國民)の艱難を憂へざるなり、

直に世の貴顯紳士なる者の良心を突き、彼等が生きて此地に生存するの價値なき者なるを知らしむるに足る、然らば彼等は何を爲すべきか、

預言者は曰ふ、先づ悔い悛むるのみ、先づ神明の前に身を赤裸にし以てその恩恵に與からんのみと、

Seek him that makes the seven stars and Orion, and turneth the shadow of death into the morning, and maketh the day dark with night : that calleth for the waters of the sea, and poureth them out upon the face of the earth : The Lord is his name. 簡易なる語、サブライムなる想、地上の改革を行ふに宇宙萬有の力に依らんとす。是を偉大と言はんか、莊嚴と稱はん乎

正道を水の如く、正義を盡きざる河の如く流れしめよ、
終には積極的の改革斯の如くわれよと叫ぶ、僅々六ヘーシ餘の誠言以て萬世を誨ふるに足る、
憂國の情は耶利米の書に充滿す、

Oh that my head were waters, and my eyes a fountain of tears that I might weep day

哭

and might for the slain of the daughter of my people — IX. 1.

ア、我が首にして水たらんには、我が目にして涙の泉たらんには、我は晝となく夜となく、我民の女國民の殺されたる者のために哭かん、

然れども彼は亦自身を慰めて曰ふ、

O Lord, I know that the way of man is not in himself : it is not in man that walketh to direct his steps. — X. 23.

神よ、我れ知る人の途は彼にあらず、歩む人は自から其武歩を定むること能はず

我は我か前途を知らず、我の運命は任かせて神にありと、然れども愛國者亦時には人生を悲觀せざるを得ず、

Woe is me, my mother, that thou hast borne me a man of strife and a man of con-

ention to the whole earth ! I have neither lent on usury ! nor men have lent to me on usury ! yet every one of them doth curse me. — XV. 10.

ア—我は禍なるかな、我母よ汝は何故に我を生みしや、全國の人我と争ひ我を攻む、我は高利を以て人に貸さず、又高利を以て人より借りず、然るに人皆我を詛ふなり、

耶利米の書を英譯聖書に讀んで我は高尚なる厭世家ヘツミストとなり、希望一點を失望暗夜に留め、勇者の如く泣いて怯者の如く愛へざるに至る。然れども希望を以て充滿する喜觀的預言者は以賽亞あり、彼に憤怒なきに非ず、然れども希望の光輝に充ちて、彼は凱歌を奏するを好んで悲鳴を發するを好まず、彼は神と宇宙との極美を知るが故に世の腐蝕に赴くを見て怕れず、靜かに天の救済を待ち不朽の希望と不撓の歡喜とを以て此世に處す、

Wash ye, make you clean ; put away the evil of your doings from before mine eyes, cease to do evil ; learn to do well, seek judgement, relieve the oppressed, judge the fatherless, plead for the widow. — I. 16. 17.

汝曹己れを洗ひ己れを潔くし、我が神の眼前よりその惡事を去り、惡を行ふことを止め、善を行ふことを習ひ、公平を要め、虐げらるる者を助け、孤兒を裁さだくに公平に、寡婦の爲めに辯せよ、

慈善的政治の本旨實に此にありと謂ふべし、
其第三十五章は希望の讚美歌、ダンテ、ゲーテの作と雖も是に及ばざる數等、

The wilderness and the solitary place shall be glad for them, and the desert shall rejoice, and blossom as the rose. It shall blossom abundantly, and rejoice even with joy and singing: the glory of Lebanon shall be given unto it, the excellency of Carmel

and Sharon ; they shall see the glory of the Lord, and the excellency of our God. —
XXXV. 1. 2.

荒野と滋潤なき地とは樂しみ、沙漠は喜びて番紅の花の如くに咲
き輝かん(以下日本譯聖書にて讀むべし)

其他四十一章、五十三章、五十四章、六十一章、孰れも大思想に孕まれたる
大文字たらざるはなし、

Can a woman forget her sucking child, that she should not have compassion on the
son of her womb? yea, they may forget, yet will I not forget thee. — XLIX. 15.

婦その乳兒を忘れて己が腹の子を憫まざるとあらんや、縦ひ彼等
忘るゝことありとも、我は汝を忘るゝことなし、

宇宙の主宰なる神にして吾人人類を愛する如斯しと、是れ天來の聲に
非ずして何ぞ、

聖書の理想的人物は以賽亞書第五十三章にあり、是を解し得て猶太教
と基督教とを解し得たりと謂ふを得るあり、全章の一言一句皆超俗超
凡にして、是を讀んで吾人は今日世に賞讃せらるゝ十九世紀文明なる
者の猶太政治家の理想なるものと相距る如何に遠きやを察するを得
べし、

紙數限り有て余は爰に詩篇の美、ソロモン王の箴言の美、雅歌 (Canticles)
と稱せらるゝ古代の戯曲の美、路得記なる牧羊歌のごときものゝ美、聖
女マリヤの感謝の歌、使徒保羅の雄辯、黙示録記者の天啓的文學の莊を
讀者に紹介する能はざるを悲しむ、若し夫れ聖書全躰が余に與ふる文
學的感動を一言以て表せんとならば余は詩人ハイ子(彼は基督教には
餘り熱心なる人にはあらずりし)が此の書を一讀し終りし後の感とし
て傳へらるゝものを余のものとして讀者に傳へんのみ、

What a book! Vast and wide as the world, rooted in the abyss of creation, and towering up beyond the blue secrets of heaven. Sunrise and sunset, promise and fulfillment, life and death, the whole dream of humanity are in this book

(英 譯)

驚くべき書！大にして廣きこと宇宙の如く、其根は造化の根底に蟠まり、其枝は蒼空の外に聳ゆ、日昇と日没、應許と踐約と、生と死と、人類の凡ての希望とは收めて此書にあり。

附 録

英語自習獨學の注意

佐 伯 好 郎

著者申す、友人佐伯氏は我國有数の英語學者なり、氏は最も組織的に此語を學ぶの術を知る、今余の乞に應じて此篇を作らる、茲に深く其の厚意を謝す

外國語の必要を認め、之を學習せんとするも、師を得る能はざるが爲、僅かに外國語研究に關する雜誌、若くは獨案内の類に依て、自習獨學せんとするに當り、學者の胸中に浮出つる疑問、一二にして足らざるべしと雖も、これ果して自習し得べきか、幾許の語を修めば略ぼ用を爲すに足るか、は實に其重要なるもの、如し、故に今、英語自習獨學に關する注意を述るに當り、先づこの問題、即ち英語果して獨修し得らるべきかを明

附

かにし、兼ねて「凡そ幾許の英語を知らば用を爲すに足るか」を明かにせんが爲に數言を費すも無用にあらざるべし。

茲に人ありて、漢學の自習獨學し得べきを主張するも、之を否定するものあるか、又た茲に人あり、自己の經驗よりして、既に英語に通じたるものは、進んで羅甸、希臘の古語は勿論、獨佛の近世語をも自修し得べしと主張するも、之を疑ふものあるか、それ漢學自習の書として、昔より「餘師」講釋の類流行し、近時に至り「講義録」の出版ありて、自習獨學の要具となるあり、又其他の外國語を自習する爲に英語にて著述されたるもの實に枚擧に遑あらざる程にして、「かの何々語メンソッド」と稱するものは既に邦人にも親しきものにあらずや、獨佛、希臘、諸語の初歩を其「メンソッド」にて得たるもの若くは漢學を、餘師講義録にて得たるもの抄からざるに、誰か能く英語の自習獨學を否認するを得んや、余がこゝに日本語と

録

附

其性質を異にすると甚しき英語と雖も、方法手段の如何に依ては獨案内に依て吾人が漢文を自習獨學し得らるゝと同等の程度までは自習し得べしと斷言して憚らざるも、蓋しこれが爲なり、只漢學は外國文なりと雖も、吾邦に在る千餘年の久しきに及びたるが爲、自習獨學に莫大の利益あるは疑なしと雖も、これ只だ其文字々義の點に於けるのみ、其「語法」に於ては漢文は純然たる外國語たるのみならず、語法文則の頗る一定し難き外國語たるなり、英語は外國語にして我國語に如何なる關係を有せず、自習に非常なる便利あるに非らざれども、僅かに二十六文字の「アルハベット」いろはと母子兩音の變音及其音符を記憶する凡て七十にして自由に讀み且つ書くこと得、且つ不規則にして原則よりも例外多しとの批難は之を免かるゝ能はざるも、尙ほ一定の文法あるものなれば、苟も漢文にして自修し得べきに獨り英語の自修し得ざるの

録

附

録

理由あらんや、且夫れ英語自修の困難中最難とも云ふべき發音讀法の如きは從來の變則者流に在ては恰も漢學者の支那語に於けるが如き感ありて自習獨學に依て得るところ正鵠ならざりしと雖も、其研究の方法次第にては甚しき變則を免かるゝを得べし。これ余が二三の青年に就て自から親しく實驗したる處にして要之讀者が英語は自習し得べきものにして其最難と稱する發音も亦た大に自習の方法ありと確信し、忍耐、苦學せば必ら老成功あること疑なし、況んや吾人か記憶すべき語數に制限あるものなれば自習獨學せんとするの人が其心を強ふするに足らん。

茲に於て乎、第二の疑問たる語數を定めざるべからずと信ず、これに答ふるに當り余は讀者に問はん、抑も讀者は凡そ幾許の日本語を知り、且つ日々用ひつゝあると信ずるか、讀者が之に答ふるを得ば又自から學

附

録

ぶべき英語の數を一定するを得んのみ、讀者は我國の小學校を卒業したるものが凡そ幾許位の文字を知ると信ずるか、これを小學讀本に就きて觀察すれば二千字以上を知るものありとは決して云ふ能はせ、蓋し二千字は讀本編輯の最高度なればなり、小學を終り中學校に在るものにして二千字を知るものは吾人の觀察するところにては最上の部に屬すと云はざるべからず、之を外國讀本に就きて觀察するに大概小學より中學一年位に用ふる迄の讀本にては二千内外にして二千七百以上のもの殆んど見當らざるあり、これ何の故ぞ、普通言語の三千を超過せざるを示すものにあらざるか、吾邦に在て一千字以上の漢字を用し得るものは漢語遣つかひにして之を了解するものも亦相當の教育を受けたるものあらざるべからず、英語に在ても獨逸語に在ても日常普通に必要な語は蓋し二千字乃至三千にして、三千以上を使用するもの

附

は文學者にあらざれば能ざる業なりと知る。彼の沙翁全集に凡そ一万五六千の語あるは寧ろ異例にして、實に万世稀有の天才沙翁の沙翁たる所以を示して餘りあるものゝみ。彼のミルトンの如き、カーライルの如きは畢生其深遠高大の思想を發表し、世界人類の血液を増したりと稱せらるゝも、其使用したる語數は一万に及ばざること一千餘と云ふに至ては、誰か人類の使用し得べき言語に自然制限あるに驚かざらんや。又マクス、ミューラル氏の説に依れば沙翁全集の一萬五六千と雖も、其三分の一は全く陳腐し僅かに字典の一隅に其遺骨を存するのみにして、他の三分一は全く陳腐と稱するを得ざるも、不用語と稱し人の好んで用ひざるものゝ如しと、故に沙翁全集中其現今使用せらるゝに足る活語は五千以下と云はざるべからず。又アデー氏の説に據れば英語聖書の如は凡そ六千語を含むと云ふ。英米に在て相當の教育あるも

録

附

のは聖書を読み得ること疑ひなしと雖も、之を悉く使用するの一點に至れば六千中の陳腐語迄を使用せざれば用を辨せずと云ふことなく、又其陳腐不用に屬すものを除去せば英語の寶庫たる聖書に在て實地に用を爲すものは三千内外たらざるを得ざるべしと信ず、之を古今の大家が畢生間に使用したる語數に考へ、之を其集中に於ける活語の數に就きて察するに、グラドストーン氏の語の適切なるを覺ゆ、氏は曰く「人は一千の語を知らば以て人生普通の事務に處して不便なかるべし」と、余が三千の英語にして足ると主張するも決して偶然にあらざる也。嗚呼、二千萬至三千の英語は普通の腦髓を有する日本人には獨學自習の方法に依ては到底得べからざるか、豈其理あらんや。英語も他の外國語と均しく自修獨學し得べきものにして其制限あること上に陳述せる如し。如何に之を自習すべきかは實際問題にして其順序方法の如き

附

は一書を爲さざれば述盡す能はざらんとすべきも、今吾國に行はる、
 獨案内等を活用せしめんが爲に自修に關する注意を述べん。
 第一、習字、順序正しく良師に従ふて學へば自然の順序の如く耳、口、目、
 手となれども、自習者に在りては目を以て始まり、手之に次ぐの順序と
 なる、故に自習者は其學習する一切の言語を書記するの覺悟あかるへ
 からず、從て讀方譯解等に進まざる前A、B、C、草書小文字を始とし、漸次
 頭文字を習ひ、自由自在に書き、いろはの吾人に容易なるが如くにせざ
 るべからず、若し否らずして深入りせば成功の希望あし、自習者は耳に
 聞くの便なきが爲に悉く筆頭に表はすの心掛と立どころに之を爲す
 を要す、特に筆記は記憶を助くるものなれば先づ習字より獨修すべし。
 然るに習字の必要を主張したる自修書なきは余の不可思議に思ふ所
 實に獨案内の欠點なり、習字は吾人其欲する字體を選び、スペンセリア

録

附

ン習字帖若くは祖來氏の習字帖にて自習するを良とす、且つ同時に心
 を一、二、三の洋數字に用ふるとを忘却すべからず、これ無用の忠告の如
 きも、この數字が我國に傳來して茲に年あるにも拘はらず、ペンを以て
 正確に書き得ざる數學先生英學者あるを知らば、余が獨學者に忠告す
 るもの偶然にあらざるを知らん。

第二、發音、綴字法、及讀法。この三者は主として耳と口とに屬し、習ふと
 云ふよりも慣れることにして「學ぶ」と云ふよりも大に似るべき性質の
 ものなれば、之を獨習し得べしとは云ひ難たきも、自習獨學に依て大に
 得る所、補ふ所あるは疑を容るの餘地なきなり、自己に獨習するの能力
 あらざるものは決して學修することだに爲し能はざるなり、特に良師
 に就くの困難ありて、かの譯解作文の良師必らずしも發音讀方の良教
 師ならず、英學教師の中にも數字の筆法をだに解せず、R、とL、S、とsh、若

録

附

くはuとoとの區別を知らず、山の發音をすら解せざる變則者尠しとせず。此の如き教師に就き發音讀法を學ぶは寧ろ獨習の優れるに如かず。故に先づ英語獨案内又は字典にて「アルハベツト」變音に通じ、變音符を記臆し、字典を使用し、一語毎に其綴字、音節符の位置を學び、綴字法に依て幾回となく發音し、同時に其譯を思ひ、全く自由自在になる迄幾回となく發音すべし。例之、See the boy and the dog. 云ふ文章あらんに、之を第一の準備たる習字の目的物とし、幾回も書し、各の綴字に注意し、oと書して其讀其譯を連想し、字引獨案内に依て其o字の一の賦字たるを知り、次にoy。其次にboyと悉く字引と書く事とに依り、其綴、其字に屬すべき音符等を記臆すべしと云ふに在り、若し夫れoyと云ふが如き二綴以上の字に在ては必らず音節強音符のあるものなれば之に注意すべし。音節は我國の語にあつては牡蠣、柿、雲、蜘蛛、橋、箸の如きものにして音

録

附

節を正うせざる時は大なる誤を生ずるあり、ex-lic(名詞)、(名詞)なるも音節符の第二綴に下る時はex-licとなり形容詞となる。音節符の大切なること如此きも此音節如何にして自修し得べきか。これ實に字典に據るより外に途なきものにして、如何に英語の大家と雖も、外國人と共に、皆字典に據て學習する者あり、故に初歩者も一字毎に字典の定むるところに從て初より大に注意し、二綴以上の語は音節の位置を學ばざれば決して其意義を知らずとす。と云ふを以て原則とすべし、如此せば自習者は英語を學び且つ之を人に教授しながら一度外國人が士官を見、何かとの間に對し「officer」と云へるに「officer」の一言すら了解せしめ得ざりし英學者に優る千萬あり、音節符の在る處にて頭を揚ぐべし、これ秘訣あり、例之はかの英語先生が「officer」と頭を揚げながら發音し、officerと頭を前に抑けたらんには必らずや外國人には通じたるなり、日本語

録

附

録

を發音するに頭を動かすの必要なきも、英語にては頭を動かさなければ發音し難きものありと知るべし。
 以上論述する所に依り所謂自習すべからずと稱するものと雖も如何なる程度迄自修し得べきかを知るに足らん、最後に解譯のことを一言せんに、譯を知らざれば讀むと能はず、意味なしに讀むは無用の事なり、故に解譯と讀法は之を分離して自習すべきに非らず、予が解譯のことに關して述べんとするに當り譯法のことを合せ述べらるはこれが爲と知るべし。

先づ第一に急ぐべからずと云はざるべからず、即ち一度に一個の文句にとりかゝり、之を白紙に寫し取り習字、字典に據て綴、及母音字の音符を學び、之を寫し取りたるものに加へ、又字典の命ずるところに音節の符を施し、一字づつ (1) syll (2) syll と頭を動し、抑揚を爲し、高聲にて獨案

附

録

内の假名にて呼ぶべし、呼ぶこと數十回なると同時に其意義に留意し、全文を通讀し英語にて意味の了解出来る迄熟讀唱讀すべし、かくして其英字を知り譯語を知り、音節を得、一文句の意を解し得たらんには直譯文を左手に有し、之を朗讀する聲に應じ白紙に記憶に従ひ、英文を草い、之に音符を加へ、音節を施し、其結果を初めのものど比較對照し、其誤謬を訂正し、一句一文の中の一綴一字の音符に至る迄正確なるを得、後始めて次の文句に取かゝるべし、一語にても了解せざることあるときは決して前進すべからず、絶對的に消化するにあらざれば大に不可あり、これ讀法と譯解とを自習し、之を實地に應用する最良法なり、彼の一日に數ページを通讀し、あから書物を離れては一語をも使用すること能はざるは語學練習の法にあらず、況んや自習の法に非ざるをや、我國に於ては教師も生徒も英語本を教習するの傾ありて、毫も英語其のもの

附

を得るを務めず、英語本は機械の一部にして、求る所は本何冊に非らば、語何百たることを思はざるが如し、語學教授として有名なりしブラツキー氏曰へらく「語學を學習する爲の教科書に一讀や二讀にて已むべき書一冊もなし」と、我國に於て語學教授の進歩せざるは全く一讀に終るに原因せずんばあらず、要する所僅かに三千を自己の所有財産とするに在り、讀本、論文、何かあらん、傳記物も紀事文も何かあらん、急に過せず、一たび得たる者は之を忘却せざることを期すべし、又如何なることあるも毎日一、二の數も第一、第二の數稱を英語にて記憶すべし、これ必要にして日本の中學卒業生にして March 14, 1899. を英語にて通讀し能はざるものあるを知らば一より始め日々數を知ること勉むべきなり、譯解の際に文典上の規則に注意すべし、英學獨案内には文法説明あり、名詞の數、及格、又代名詞の性、數、格に注意し、動詞の移置、及過去、現在、未

録

附

來等の時制に着眼し、觀察に依りて文典を知ること努むべし、かくして後、日本語にて著述せられたる獨案内流の文法を一冊熟讀せば大に得るところあるなり、文法書を熟讀したる上にて再び是迄熟讀したる原文を朗讀し、文法の智識に依て最初心つかざりしところに注意せば大に得るところあるや疑なし、獨習の士失望すべからず。

録

論述するところの現今吾國に流行せる直譯獨案内、若くは文法講義を評せんに彼等の多數は初學には高尚不當に失すると云はざるべからず、蓋し我國に行はるゝ獨案内は元來、獨佛の人が英語を學ぶ目的を以て著作せられたるものを其儘翻譯したるものなれば、獨佛人に取つては不都合なきも、彼我言語の性質上、日本人には大に不都合なき能はず、かの一章の日本人には長に失するが如き、冠詞用法、前置詞、代名詞の格に關する説明の甚だ不注意なるが如きは其例なり、故に使用すべき順

序に従ひ其書を掲げて已まんのみ

第一、習字帖

第二、綴字書獨案内(初級以下)若くは第一讀本の獨案内

第三、英語學獨案内(文法の初歩と綴字の規)

第四、プリンクリーの獨案内

第五、英文典(チスヒールド著)

附 録

西班牙語の研究

著 者

日本人は西班牙語の研究を忽にすべからざるなり。そは是れに依て吾人はカルデロン、セルベンテス、ローベ、フランシスコゴメーズ等の大作に接するの便を得るのみならず、西班牙語は將來の大國民の言語と

附 録

録

して吾人の注目すべきものなればなり。我が南隣に非律賓群島ありて其米國より獨立すると否とに關せず、其遠からずして一大貿易國と成るは決して疑ふべきにあらず。八千方哩の面積と七百万の人口とを有する我が南隣の歐羅巴的言語は充分吾人の研究に値するものなり。若し夫れ太平洋彼岸墨西哥以南の地に至ては西班牙語は唯一の開明的言語にして、北米リヲグランデ河より南米の南端ホルン岬に至るまでは實に西班牙語普及の地なりとす。此に七百五十万方哩の邦土と四千萬の民とありて、此語に依て特種の文物は發達せられつゝあり。詩人としてはアルゼンチン共和國にカルロス・ギードーあり、南米のロン・グフエローと稱せらる。又フアン・ゴトイありて、アンデスの偉觀を歌ふて名あり、玖瑪にゴメーズ女史出で、南米齊しく彼女の麗詞を唱ふ。ギレルモ・アッタは智利國のバイロンと稱せらる。墨西哥其のマヌエル

附

アカナは悲痛の想を以て名あり、其他伯刺西に、ホリビヤに、ウルゲーに吾人の耳にせざりし大詩人あり、又政治家として、墨西其に、デイヤズあり、智利に、バルマセダ、バラゲーに、博士フランシス、亞善丁共和国に、サソマルナン等あり、南米大政治家の特性として、政治的技術に加ふるに、常に幽遠なる哲學思想と高遠なる詩的觀念を以てす、國民としては北米合衆國人、加奈陀人等に及ばざる遠しと雖も、個人としてはリンコルン、ウエブストルに比對するの人物に乏しからず、南米の政治文學は決して蔑視すべからざるものなり。

録

日本國の發達は西班牙的亞米利加の發達と相伴ふべきものなり、墨西其、白蠟、伯刺西等は我が同胞の移住に最も適したる國なり、彼等の文明の程度亦我に優らざるが故に我と相互的交換をなして、殖産上、思想上、利益最も多かるべし、余は我が邦人が斯民と斯國とに對する今日の如

附

く冷淡ならざらんことを欲す、而して我國の平和的膨脹を計らんが爲めに吾人は盛に西班牙語を學び、單に西隣の支那にのみ注意するを歇めて、意を東南の大陸に馳せて其同情的併呑を畫すべきあり。

録

明治三十二年四月廿八日印刷
明治三十二年五月七日發行

著者

內村鑑三

東京市牛久保町三丁目三番地

發行者

東京府北豐島郡荒川町大字上駒村
十六及十九番地
坂井善三郎

横濱市太田町五丁目八十七番地

印刷者

村岡平吉

發行所

東京府北豐島郡荒川町大字上駒村
十六及十九番地
東京獨立雜誌社

横濱市居留地八十一番館

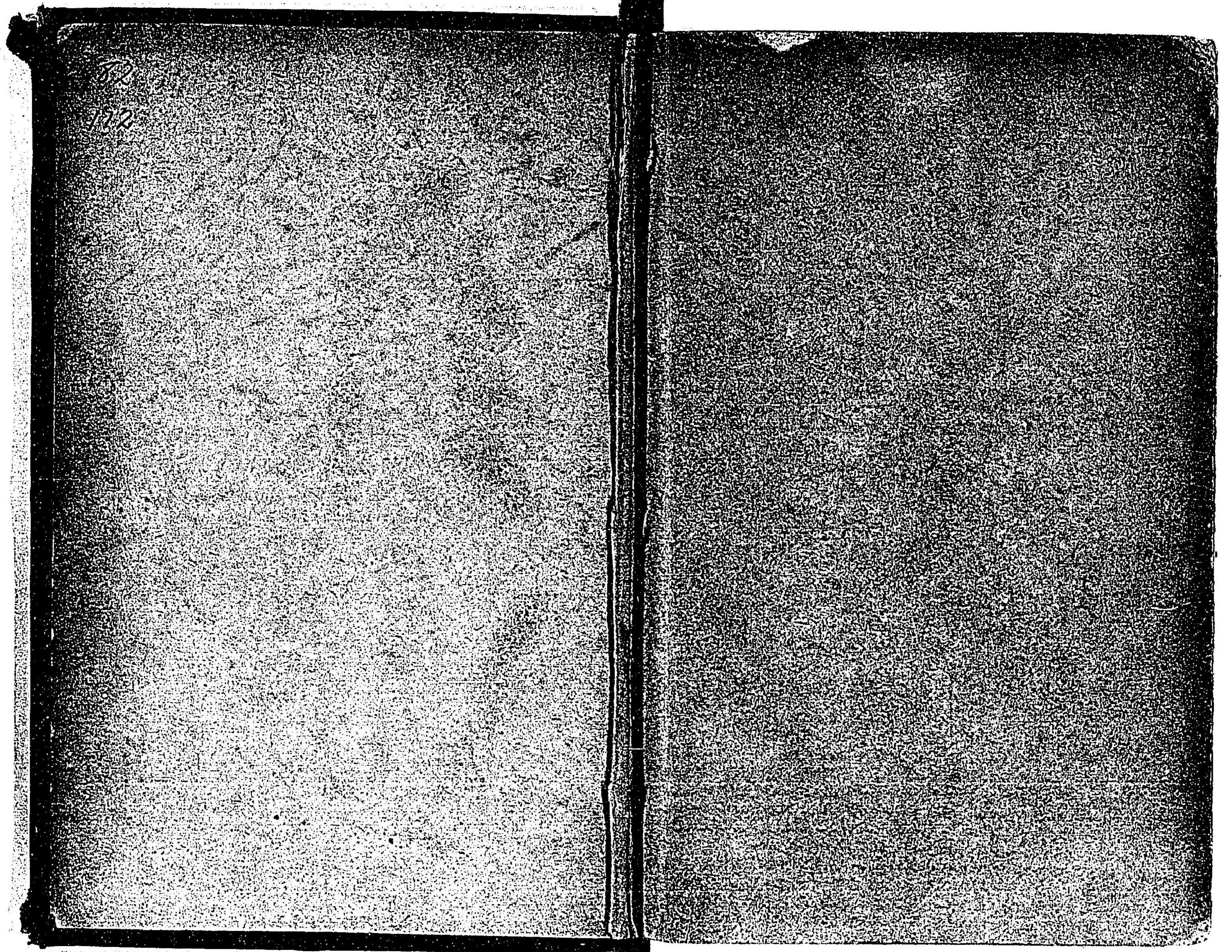
印刷所

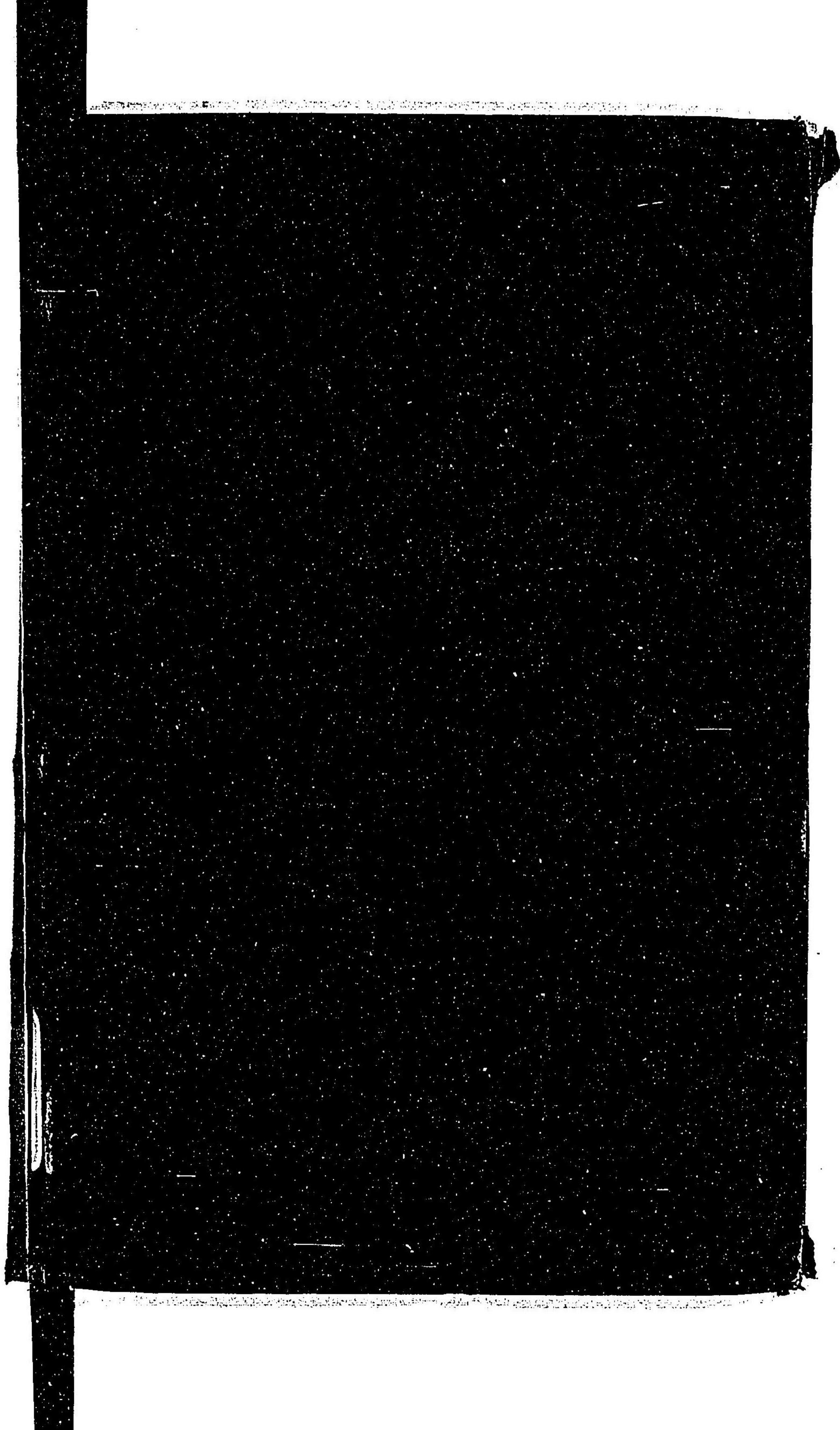
福音印刷合資會社

内村鑑三先生著書

	定價	郵税
三版 基督信徒の慰	二十五錢	四錢
傳道の精神	十五錢	四錢
眞操美談 路得記	十五錢	二錢
後世への最大遺物	十錢	二錢
月曜講演	二十錢	四錢
三版 地人論	四十錢	六錢
三版 愛吟	十五錢	二錢

東京獨立雜誌 毎月三回發行 一冊五錢 郵税五厘





82
112

076603-000-1

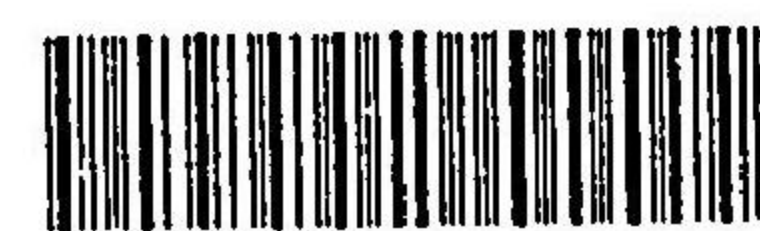
82-112

外国語之研究

内村 鑑三/著

M32.5

DAA-0012



8
11

